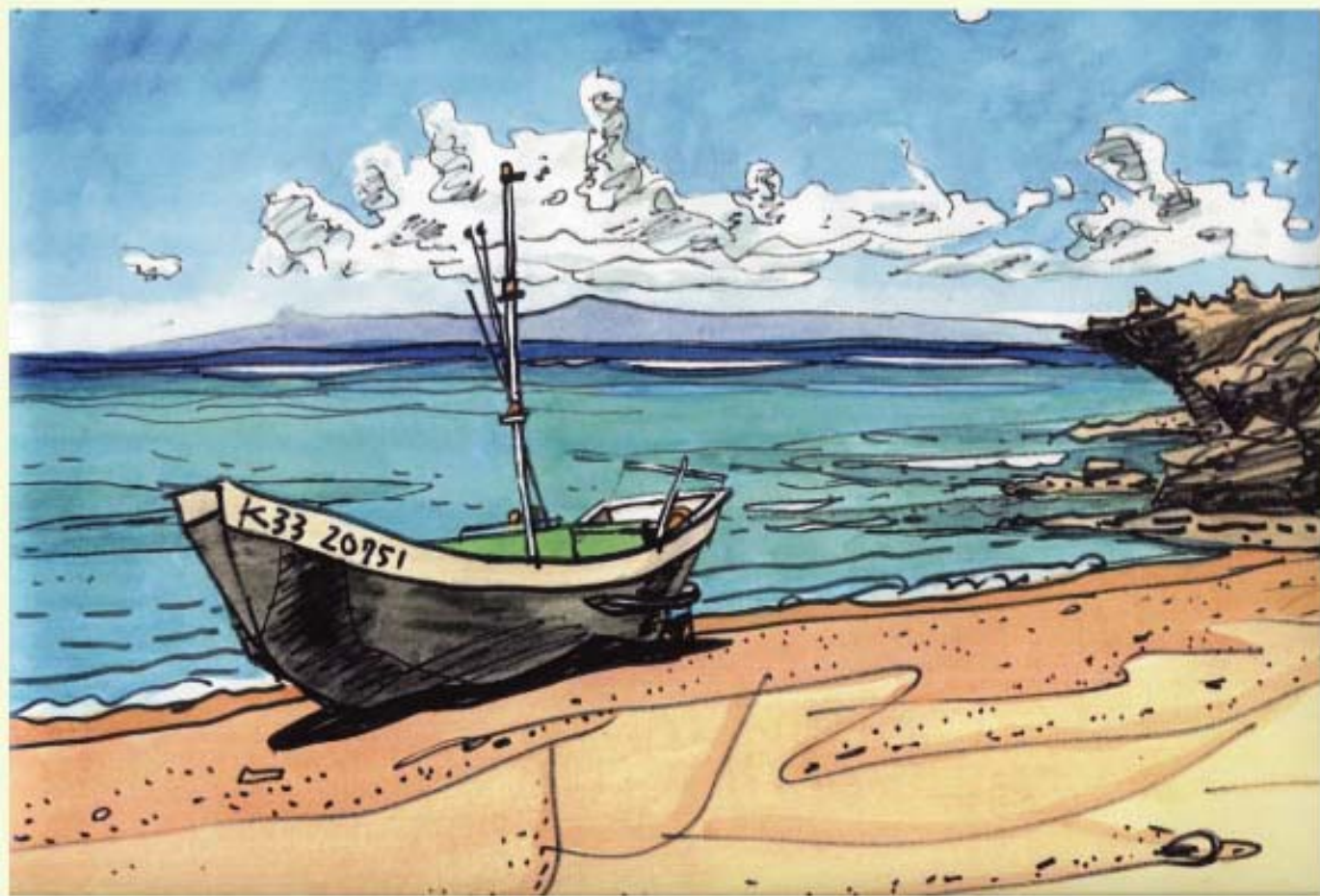


戦後五十周年記念誌

わたしの戦争体験記



まえがき

どこまでも澄みきった青空のむこうに、真っ白い入道雲がその力を誇示するかのようにもくもくと湧き出ています。

暑い夏が訪れるたびに、昭和二十年八月のあの忌まわしい日のことが脳裏に浮かんでまいります。

今年はいれから五十年、満五十回目の夏を迎えて、暑さが一層きびしく感じられます。思い起こせばこの五十年の間には、私たちの与論にはいろいろなことがありました。あの廃墟の中で、そてつ粥をすすりながら、塩味だけの汁鍋に一尾のクサビ（ベラ科の魚）を兄弟で奪い合いをしなければならぬ程の暮らしから、現在の与論の発展を誰が想像できたであろうか。

そして、私たちはこのかげに当時の与論の現実をしつかりと見据えつつ、戦後復興

のために全身全霊をうちこんでこられた先達の努力があったことを忘れてはならないし、又これらの歴史を今後永遠に続く私たちの子孫に残していく義務があることも忘れてはならないのであります。

このようなことから、与論町教育委員会では、戦後五十周年を記念して戦中から戦後にかけての貴重な体験の記録をまとめることとして「戦後五十年、わたしの体験記」を刊行することといたしました。

ご寄稿いただきました方々に深く感謝申し上げますとともに、益々のご健勝を祈念申し上げます。

平成七年八月

与論町教育委員会

教育長 竹下

徹

も く じ

島の守り（与論島防衛隊記）	山	市郎	1
戦時中在郷軍人としての動向について	田中	尚良	6
戦争に弄ばれて	竹内	浩	12
開聞丸爆沈体験記	中田	盛雄	19
あゝあの海、あの空、あの土で	野口	才蔵	25
戦後五十年、私の体験記	川上	末吉	39
私の戦争体験記	竹園	茂光	46
思い出せば	嶺島	峰永	53
与論の情報通信	遠山	哲治	59
私の戦争体験記	龍園	福秀	68
座礁LSTと理科教育	光	才池	76
糸満マニユ物語	竹下	徹	86
アギヤー物語	若松	北川	91
一瞬の悪夢	池田	利徳	100
振り向けば未来	竹下	徹	108

島の守り（与論島防衛隊記）

与論町叶山 市郎

太平洋戦争は遂に南西諸島にも敵が上陸するかも知れないという急迫の状況になり、昭和十九年六月二十七日、駐屯部隊小野少尉以下四十四名が与論島警備のため来島警備にあたる。町民はその指揮下に入り戦時体制となる。

それ以来在郷軍人及び町民ピヤヌパンタ、ムミントウバルに戦車壕の構築又兼母崎に座礁した物資輸送船（木造船二隻）の物資運搬、これは在郷軍人がホウタイの隣鉾倉庫に運んだ。輸送船の指揮官の黒田中尉と石塚中尉の指示に従った。

昭和二十年二月初旬、与論村の在郷軍人が召集され分会長山市郎軍曹を中隊長とする防衛隊が編成され、小野警備隊長の指示のもと警備隊に協力して与論島の防衛（特に海岸の警備）に当たった。

編成は次の通りであった。

中隊本部 中隊長 軍曹 山市郎

中隊本部付
伍長 故大田森順・軍曹 故田畑行実・伍長 故麓垣茂

衛生班
衛生上等兵 故大内末吉・歯科医 故村田哲雄

介護医 故岩山新二・鍼灸医 田前浦志

第一小隊
与論校区 小隊長 軍曹 故宮崎清菊

第一分隊長（城） 軍曹 酒井茂光

第二分隊長（朝戸） 上等兵 故徳田盛富

第三分隊長（西・東） 軍曹 故福永保蔵

第二小隊
那間校区 小隊長 軍曹 町 茂

第一分隊長（那間） 兵長 故池田実俊

第二分隊長（古里） 兵長 故本 金村

第三分隊長（叶） 上等兵 故町田原長

第三小隊
茶花校区 小隊長 伍長 山下 勇夫

第一分隊長（茶花） 上等兵 故町永吉住・上等兵 吉川秀雄

第二分隊長（茶花） 上等兵 市来平三

第三分隊長（立長） 兵長 向井富悦

最初は右の通りの編成であったが与論校区は人員が多かったため更に一個小隊ふやし第四小隊とし小隊長を軍曹福永保蔵とした。

本部の所在地は次の通りであった。記して家主に謝意を表す。

中隊本部 朝戸 白尾義之助氏留守宅

第一小隊本部 中隊本部に同じ

第二小隊本部 那間 田畑秀雄氏宅（後方に広い防空壕・今もある）

第三小隊本部 茶花 故山 高嶺氏宅

第四小隊本部 東区 故児玉新森氏宅

防衛隊の服装は各自所有の軽装でそれに、（ミノ）（カサ）をヨロイカブトのように着用していた。武器は竹槍一本であった。

食事は各自持参であったが、食糧難の時で、いも又はそてつ実ごはんもあった。私

は或る時第一小隊の大田村峯氏からミシジマイの御馳走になった。其のおいしさは今も忘れられない思い出である。

いよいよ戦況が悪化し敵の上陸が予想されると駐屯部隊長から指示があり、敵が上陸した場合は与論島は全員叶の梶引半田の西下に集結し全員玉砕する旨示達された。

尚防衛隊はフブシャと牛道一帯（今の高校の南側）に集結するようにとの内命があった。

三月初旬の某日、私は宮崎軍曹を連れ防衛隊の集結地を調査するため叶の山為島氏の製糖場の側を通ったら、中に区長さん達が集まって、悲壮な面持ちで協議の最中であつた。議題を伺ったら、「隊長の集結命令について困っている。今の熾烈な空襲下では各字の場所の割り当ても困難で防空壕を構築するのも昼は駄目で夜だけではおぼつかない。移動するのも大変である。上陸以前に銃爆撃をうけるのは必定である。」と皆途方にくれている。それで私は尋ねた。「集結させることが出来ない場合はどうするようにと云われたのか」と。「全員捕虜にならず自決するようにとのことだった」

と誰かが云った。私はその時パット閃いた、そこに隊長の恩情があると。「それでは皆さんは隊長の云われた通りにしましょう。各自の避難所で自決するように集落民を指導して下さい、そして集結はやめましょう。」と云ったら皆ホットしたようであった。

後日、終戦当時の朝戸区長村田助市氏は私に「市郎 お前のお陰で助かったよ」と云われたが、それは神明の御加護で敵が上陸しなかったからだと思っている。実は私は誰にも云わなかったが、敵が上陸したら防衛隊は各家族のもとに帰して家族や隣人を守らせる腹づもりをしていたのであった。

昭和二十年八月十八日午後四時命令、大命に依り軍は直ちに戦闘行為を停止すべし。昭和二十年八月二十六日、本日二十二時を以て防衛隊の解除命令あり。とうとう任務は終わった。

日支事変、太平洋戦争と幾多の戦友（この中には私の弟福納もいる）が国の為に散華されたのに私共は生き残って今度こそ郷土防衛に殉ぜんと覚悟していたのに、神明の御加護により敵の上陸もなく、又空襲下に二十四時間の海岸の岩場やアダン林の中

で警備にあたったのに敵機の機銃や爆弾、又焼夷弾にも更には艦砲射撃の砲弾にもあ
たらず一兵も損せずして終戦になったことはむしろ奇蹟であり神明の御加護の賜物と
云うべきであり感激に堪えません。

尚、分隊長以上の幹部二十一名中、五十年の歳月は十四名の戦友が既に他界されて
いる。それからすると四百名の隊員中おそらく二百余名近くは既に鬼籍には入ってい
ると思われる。ありし日のミノカサ竹槍一本のケナゲな姿を偲び、敗戦時の風潮の中
で人知れぬ御苦勞を思いその御功績を讃え御冥福をお祈りします。

平成七年十月九日 終戦五十年に際し 八十六歳の老兵 山市郎記

戦時中在郷軍人としての動向について

与論町那開 田中尚良

先ず自分のことから記してみたいと思います。昭和十三年一月十日、鹿児島歩兵第

四十五聯隊に現役兵として入隊。同十四年五月中支漢口へ出征し、各地で戦闘に加わりましたが、武運良く命拾いして同十五年十二月には無事帰還することができました。帰還後間もなくして役場入りすることになり、当時とても忙しい兵事事務の担当、新入兵や次々と召集される出征軍人の武運長久祈願祭、そして、その明日は見送り等。特に痛ましい戦死通報を受け、その遺家族へ文書の送達や遺骨の出迎え、そして明日の村葬の前夜祭等、私達数少ない兵事担当職員は大変なことでした。

ある晩、時間外に陸軍は鹿児島聯隊区司令部、海軍は鹿児島海軍人事部より沖永良部警察経由で召集令状電報が来たので、小使いさんも帰った後、又業夫も時間外で雇えないので、一人で電灯なしで、当時電話もなければ、バイク、自転車もなく山道を歩いて配った挙げ句、東区の南盛信さんという家を周囲の人々に尋ね聞きするほかないことでしたが、やっと探し当て、海軍召集令状を渡し終え、各受領書を大事にして、麦屋、朝戸ピヤー又半田を下り、竹兵事主任へ報告方々各本人の受領印を押された赤紙受領証を上げた後、兵事主任と二人、種々の事務整理等を終え、やっと自宅に帰る

こと午前三時頃でした。途中タンブの林さん宅北側で道路拡張工事の溝に落ちてしまい、「はっ」と気付いたら、久行じいさんの手造りイモ弁当テルガマは押しつぶされていたが、怪我はなかった。(よほど昼夜の疲れがきたのでしょう)

戦争の激化に伴い応召兵の見送り、次々と戦死者遺骨の出迎え、村葬の参列、各小中学生は勿論、在郷軍人、婦人会、青年団、一般村民は仕事する暇もなく、尚在郷軍人は、山市郎与論村防衛隊長の指揮下、小野与論隊長とも連携を取りながら、各校区に分隊長を決め、その指導の下、各部所に集まり、防空壕の掘り方やわら人形を立て、毎日竹槍訓練をしていたが、中には軍事教育も受けてみたこともない方もいて、今の軍事教育は、こんなものだといわんばかりにその人たちに私的制裁を加えたりしたらしく「もう明日からは防衛隊には行かない」と嫌がる人もいたとのこと。わが那間校区は、故田畑喜佐村宅後に集まり、北へ向け、故青山住直さんのウローへ数十メートル掘っていました。昭和十九年夏頃からは、友軍の小野少尉を隊長とする一個小隊が来て、島の中心部の九十四高地松林中に陣地を構え、沖縄の軍部と連携しながら、

当地からも数十人召集され、毎日防空壕掘りに励んでおりました。

昭和十九年十月十日与論に初めての敵機銃撃を、茶花停泊中の与論丸に当りましたが、人命には異状はなかったのですが、明日の出港の与論丸には、鹿兒島、長崎、満州各地へ引き揚げ疎開荷物が一杯積み込まれていた。

二十年三月頃からは、毎日のように供利、宇勝、寺崎海上より陸上へ向けて、ときどき威嚇射撃をするようになり、あちこちで砲弾の後が見つかるようになりました。

又、ある日の夜明け方、空中戦の音声が聞こえたので庭へ出てみると、真っ赤に燃え落ちていく姿をみて間もなく、機銃の音が止んだので、北へ走って行ってみたら、西田徳義さんの田んぼに友軍機が飛行士と共に黒焦げになって落ちていた。後日の話によると、古里の山田繁雄さん宅付近にもう一人の飛行士が落ちていたとのことでした。

その後は防衛隊員も各自の家に待機していて、万一敵が上陸した時は、各地区にホラ貝を用意していて、ホラ貝を合図に決められた集結場所に、各自竹槍を携行、各家族共々に最後まで戦いぬき最期を遂げる約束でしたが幸いにして、五・六月頃からは、

空襲も艦砲射撃も下火になり、学校や茶花市街地又は各地区で家を焼き尽くされたことは残念でしたが、与論島民が命拾いができたことは、不幸中の幸いでした。このことは軍艦よりの威嚇射撃や上空よりのときどきの威嚇射撃に対し、小野防衛隊長が一発の反撃の発砲も許さなかった敵命のお陰だったと信じています。敵機は超低空をし、撃墜しようと思えば簡単にできました。血気にはやり、発砲しようとする者もいたが、島民の命を預かる小野隊長は、発砲すれば、ここに兵隊がおることがばれ、総攻撃をかけてくるに違いない、そうすれば与論島はひとたまりもないという判断の下だった。あの英断がなければ全滅していたでしょう。

前後になります、私たちの当地ゼロカアブ壕生活のことを記してみましよう。

昭和二十年初旬からは空襲が激しくなり、約五十戸近くの人たちが集まり、三十戸は近くの富成アブに集まり幸いなことにアブの奥底には水が豊富にあるということでした。朝は当番を決め、石油缶を用意して、便所搬出作業をしました。北原豊さん（アブの地主）を中心に若い人たちが牛をつぶし、安くて皆へ分け合っていました。

外には空の警戒番等を置いてやっている中、ある日の夕方、六時ごろどこからともなく、ヒュウヒュウと焼夷弾の音がした。皆はアブのなかに潜んでいたが、音が止んでから、森の中からのぞいてみたら、すぐ近くの高田実英さん、池田政英さんの家が真っ赤に燃え上がっていた。

夕方暗くなるのを待って各自の家を確かめに帰りましたが、お陰で私の家は無事でしたが、青山住直さんの家や竹下茂徳先生の家は残念ながら焼かれていた。その日は茶花市街地、三小学校その他、各地がだいぶ焼かれていた。自分は役場の心配もしていましたが、役場は叶集会所と叶の茶畑納森の二軒に事務所を移動していたので幸い無事でした。五・六月頃は下火になり、八月には思いもよらぬ悲報に接し、終戦を迎えた次第です。その終戦を迎える直前、郵便局やその他不便をきたす関係で、すでに茶花公会堂に二度日の役場事務所を移動していたが、同所で終戦勅語を迎えた次第でした。

早速上司より兵事関係書類は一斉に、早急に焼き捨てるよう命令がありました、こ

れまで竹兵事主任と二人で大事にしてきた甲斐もなく、茶花公会堂裏のアダン山まで、一切の書類を運び、泣く泣く焼き捨て完結したことです。天皇陛下の終戦勅語にありまますように「耐え難きを堪え、忍び難きを忍び」私達二人も全くその通りですよ、ね、と話からウグラ山を下って来た次第です。

尚現在生存者は少ないが、当時の金井清実村長、山元喜久政助役、他先輩方を偲びながら話の場を持ちたいものです。要を得ないことを乱筆で止めます。

平成七年十一月

戦争に弄ばれて（満州哀史）

与論町茶花 竹内 浩

家の裏庭で防空壕を掘っている母のそばで土の運びだしの手伝いをしていると、西の方から飛行機の爆音が聞えてきました。手に持っていた箆を投げ捨て、西側の畑に

行って空を見上げる。たしか四機だったと記憶しているが黒い色をした飛行機が西の空を北へ向かっていました。その中の一機が群れを離れて東に向きを変えた。那間の上空あたりで今度は向きをこっちに変え、黒煙を吐きながら突っ込んでくるではありませんか。びっくりしてその場を逃げようかと思ったとたんでした、「ババババババーン」、驚くも驚かないも未だ一メートルも掘ってない防空壕へ一目散に走り込んだのでした。これが世にいう昭和十九年十月十日の沖縄与論を襲ったはじめての空襲でありました。

当時私は八歳と八ヶ月、茶花国民学校の三年生でありました。その時の機銃掃射で茶花港に停泊していた与論丸が破壊されて浸水、積んであった私達二家の荷物も水浸しになってしまいました。

実は、私達（祖母ウシ・母ソメ・私浩・弟傑・そして叔母キクとその娘好子の一行六人）は、満州にいる父得吉のもとへ疎開する為に与論丸に乗る予定だったので。

当時私の父は、満州の首都・新京市（現在の長春市）で満鉄青年学校の教師をして

おり、その父を頼ってすでに兄（啓・新京第一中学校二年生）・従姉（静子・二十二歳・日満商事勤務）・従姉（富山きよ子・十八歳・満州中央銀行勤務）が新京に渡っておりまして。

十月十日の空襲による破損を修理し、はじめての航海に出る与論丸で与論を出発、名瀬や鹿児島で足止めをくいながら、明けて昭和二十年二月七日の夕刻、零下二十度、激寒の新京駅に降り立ったのでした。

離ればなれになっていた家族がやっとそろい、これからは幸せな毎日が続くはずでありました。

その頃、神国日本が苦しい戦いを続けているということなど私の家族の誰一人として知る由もありませんでした。昭和二十年四月になって、私は新京市立桜木小学校の三年生になりました。兄は新京一中の三年になっていましたが、一中の三年生全員が食糧増産を目的とした学徒動員に駆り出され、満州の最東端、ソ満国境の東寧（とうない）という所に行っていました。そして八月、ソ連は突然日本へ宣戦布告、満州国

境から怒濤の如く攻め入ってきたのです。

首都新京においても、老人婦女子は全て北鮮（朝鮮の北部）へ疎開するようにとの急な命が下り私達も父を残して疎開することになりました。疎開先は平壤の少し満州寄りの小さな駅でしたがその駅名を思い出すことができません。近くに美しい小川が流れる町外れのお寺風の建物に二・三十世帯の人達と一緒に入れられました。そしてあの八月十五日、敗戦の詔を聞くことになるのです。泣き崩れる大人達をみながら幼かった私には、それ程の感慨などは湧いてきませんでした。終戦の翌日、平壤の近くは治安が悪いということで、一行はもう少し北の宣川（せんせん）という町に移りそこで新京からの連絡を待っていたのです。何週間かが過ぎて新京へ帰ることができませんでした。

一カ月も経っていたであろうか、そのわずかの間に新京の街はあまりにも変わりはてておりました。大満州の首都、日本国によって徹底した都市計画がなされたはずの都市・新京特別市は汚れ放題の街に変わりはてていたのです。父は失職していました。

安物の時計などを買い求め、それを満州人が集まる市場に行つて売り捌いて一家の生計をたてていたのです。学校はというと本来の校舎は使用できず、民間の施設を使つての間に合わせの授業があり、私もそこに通つておりました。

夏も終わり秋も深まりつつあつたある日のことです。ソ満国境に学徒動員され、消息不明になつていた兄が突然帰つてきたのです。頬の肉はおち、テレビでみるあの痩せこけた骨と皮だけの難民、あれと全く同じ姿です。兄達はソ連の侵入により収容所に入れられたが、そこを脱走して何百キロもの道を逃げ帰つてきたとのことで、精神力と体力のある者だけが生き残れたとのことでした。

こうしてとにかく家族がそろいました。兄は身体が元気になるはずと働くことになりました。兄と私とで豆腐売りをすることになりました。季節はすでに冬になっていました。零下数十度という早朝四時に起きて仕入先に行き、トタンでできた角型の一斗缶二ヶに五十丁の豆腐を仕入れ、朝食の支度をする時間をみて、住宅が集まつてい

る地区を廻るのです。長めの天秤棒の真ん中に豆腐を入れた缶二ヶを吊り下げ、前の

方を私（小学校三年生）が、後の方を兄（中学校三年生）が担いで売り歩くのです。「オートフ・ガンモドキニアブラアゲー」と繰り返しながら寒い街を廻ります。幼い兄弟のトーフヤサンは同情も手伝ってお得意さんがたくさんできました。まがりなりに竹内一家は順調な日を過ごすことができるかに思われたのでした。しかし、こんな日も永くは続きませんでした。

昭和二十一年三月十八日、朝鮮疎開から帰って以来体調をくずしてずっと床に伏していた従姉の静子が亡くなりました。そしてその喪も明けない六月五日、今度は兄弟の中でも元気であばれん坊の弟・傑（まさる・小学校一年）が脱腸の手術中、麻酔の不手際から死んでしまったのです。戦後のどさくさの中とはいえ、現在でしたら医者の責めはまぬがれないことでしょう。両親始め一家がどん底に突き落とされたような暗い日が続きました。

七月になって内地への引き揚げが始まりました。真夏というのに貨物車にぎゅうぎゅう詰めになされて新京駅を後にしました。途中、錦州（与論開拓団の本拠地・磐山の

省都)の收容所に收容されましたが、ここでまた従姉のきよ子が急死したのです。ひと晩発熱し、吐いたり下したりして、早朝には死んでしまったのです。コレラだという噂もなされました。

数日後、一行は錦州を発つて黄海の奥、ぼつ海に面したコロトウの港から米国の貨物船リバティー号に乗せられ一路日本本土へむけて出航したのです。三日目か四日目頃に船は福岡の博多港に入港しました。

そして、博多の收容所、鹿児島島の收容所生活を経て与論の地に辿り着いたのは十一月の始めだったと記憶します。

思えば昭和十九年の暮れに与論丸で与論を出てから凡そ二年の年月が流れておりました。その間目的地の満州で落ち着いた生活ができたのはわずか半年でありました。

満州の大地に無限の夢をふくらませ、大海を渡った一家が、大東亜戦争という一大事件に弄ばれた哀れな運命でありました。

あれから五十年、一家はあの忌まわしい過去を忘れたかのように毎日を生きている

のです。(完)

開聞丸爆沈体験記

中 田 盛 雄 (大正十二年生)

昭和二十年二月十八日(旧暦一月七日)午前九時、沖永良部と与論の間あたりで、御用船開聞丸(木造約八十屯八十馬力)が、アメリカの飛行機B24によって爆沈させられた。私はそれに乗り合わせ、運良く助かった。その体験記である。

当時、戦況は日増しに悪化し、与論も空襲が激しくなった。沖には敵艦が横行するようになっていた。制海権も制空権もなかった。その中を徳之島に軍用飛行場建設作業に徴用された。

徴用されて行くようになったのは、当時は、兵隊か軍関係に従事しない者は非常に肩身の狭い思い(恥ずかしくて与論におれなかった)をしたからである。私も海軍に

志願し、長崎の佐世保に徴兵検査に行ったのだが、耳が遠いということで採用されなかった。四国までも行つて、若松内渡美さんなどとアギヤー（船団を組んで綱で魚を獲る漁）をして、軍に納めていた。稼ぎは漁獲にもよるが、年俸で千円だったが、当時は大した価値があつた。とつた魚は、呉の海軍に納めていたのでお国の役に立っているのだから恥じることはないと思つていたが、親戚から「私は都合が悪いのでかわりにいつてくれ」と頼まれたこともあつて、やはり行くようにした。私に頼んだ親戚本人も後になつて、「後で行くよりも今行つてすまそう」ということで一緒に行ったが、かわいそうな事にその人は爆死した。徳之島に行く軍用船は、昼間航行すると敵に見つかるから、夜航行することがいいということだった。

開聞丸で、旧供利港（現在の供利漁港）から出港するようになっていた。弁当を作り、夜中に歩いて供利港へ行つた。同乗する作業人夫は四十七人だった。兵隊が二人（軍曹と伍長）が引率した。中には遅れて夜が明けてから来る者もあつた。めぐり合わせが悪い時は悪いもので、出港を急がなければならぬというのに、錨が引つ掛か

ってなかなかあがらなかった。ようやくあげて出港するときにはもう太陽が出ていた。与論と沖永良部の真ん中あたりに行った時、東から敵の飛行機が来た。それを見て「与論に引き返そう」と数名が、船長に言ったが船長は「馬鹿野郎、船は船長まかせだ。航海を続ける。」と言ってそのまま進んだ。

飛行機は超低空をして来て、機銃掃射をし、爆弾を落としていった。飛行機は向かってくるときは前から、飛び去るときは後から機関銃を射撃してきた。船長びらの前に軍曹が弾にあたり、倒れて死んでいた。爆弾は船尾にあたり、破壊した。船尾にいた人で、太ももから打ち切られた人もいた。船はそのまま航海を続けた。人々はあわてて船室に逃げ込んだ。飛行機は旋回し、とって返してきた。田皆岬方向から海面すれすれに飛んできて、再び爆撃した。

私は、船首部分のデッキのアンカー巻機の陰に身をかがめた。機関銃の弾は、私の肩の服を射抜いた。銃があれば下から飛行機の腹部を簡単に射れる状態のところを、頭上すれすれに飛んで行った。船には銃は備えてなかった。潜水艦に落とすダイナマ

イトだけだった。

今度は爆弾が機関部に命中し、船は真つ二つにされた。私も暴風で海中にふつとばされた。しばらくは意識を失いどうなったかわからなかった。

ブリッジの天井ぶたに四名ほど乗っていた。四角の水タンクに乗っているもの、マストにすがっているもの、いろいろであった。片目を射抜かれて、「玉置、玉置」といいながら、私の肩にすがってくる人がいた。私は無理にその手を引き離した。私も生きるか死ぬかだから。見ると船は、船首部分は上がって、中央部を下にして、ゆっくりと沈んでいくところだった。四国から持ってきたボストンの中から、綱つくりいを使う小刀と、水中眼鏡を探り出し、船にくくられている救命ボートのロープを潜って切って切った。ロープは太くてなかなか切れずに、三回かかった。二十二・三歳の若い頃だったからできたと思う。ボートは浮かべたものの、機関銃射撃により、あっちこつちに穴が開いていた。幸いにおひつ（ご飯を入れる容器）が流れているのを見付け、泳いで行ってそれを取ってきてボートの中の塩水を汲み出した。

近くを、永玉置さんが顔から頭にかけて血みどろになりながら泳いでいたので、ボートに引き揚げて寝かせた。ボートには、私、野口前村さん、永玉置さん、直野さん、伍長、船員二人、飯炊きの合計八人が乗った。一人には塩水を汲み出させながら、残りの人は、舟板の破片で漕いだ永良部に向かって漕ぐのだが、北風と潮の流れのために、ボートは次第に伊平屋の方向に流されていった。北風の寒い日だった。皆裸で寒さにふるえ、唇も真っ黒、寒さに耐えるのが大変だった。私は以前に船員から、「服はあるだけ着ていたほうが、船が沈んだとき助かるよ」ということを聞いていたので、服は着たままにしていたので助かった。服はぬれていてもやはり着けていたほうが寒さはしのぎやすかった。腹も減った。見たら桜島大根が流れていたの、泳いでいて取ってきて皆で分け合って食べた。

幸いに、永良部の大山の軍の監視所で、私どもを見付け、知名の小米から帆掛けサバニが助けにきてくれた。それにはしかし四名しか乗れなかった。その後軍の引き船が来て、私たちを知名の小米まで引っ張って連れていってくれた。この引き船が来た

ときになって、やっと「命助かったな」と思った。港に着いたのは夜の九時だった。

小米港では火を炊き、服を着替えさせてもらい、おかゆも炊いてふるまってくださった。知名には軍の兵舎施設がないということで、トラックに載せられて、和泊に向かった。運の悪いことは重なるもので知名村のはずれの余多橋まで行ったところで、エンジン故障で止まってしまった。そこから和泊まで歩いた。

その後徳之島に行かず、「帰郷しなさい」ということだった。戦況は激しさを増し、定期船は途切れがちだったからあてにできないということで、知名に舞い戻って古いサバニを買い求めた。持ち金は開聞丸と共に消えたので、与論に帰ってから払う約束で買った。夜、帆を掛けて走らせ、大金久に帰り着いた。

遭難した翌日伊平屋に流れ着いて助かったのが五名いた。その方々は、与論の兼母沖をピヤー又半田から牛を追って歩くのが見えている距離を流れていった。当時、与論にも監視員がいた筈だが助けには来てくれなかったそうである。後日私は、当時監視員であった私の親戚にそのことを抗議した。

時代の波間、運命の波間に漂った五十年前の体験記である。

私は幸運にも九死に一生を得たが、命落とされた方々に謹んで哀悼の意を表します。

平成七年十一月

ああ！ あの海 この空 この土で

与論町茶花 野口才蔵

一、運命の与論の島と

私は昭和十八年四月、与論国民学校助教として初めて奉職。担任学級は四年男子組（児玉政徳氏同窓生）であつた。何しろ兵隊から帰つたばかりで、教育実習の経験もなく、ぶつつけ本番で全く無謀という外はない。時の校長は酒匂川高先生で、一時間だけ国語の模範授業を見せて戴いた。どちらかと言えば画一注入的な授業だつたと思う。忘れもしない「おうぎのまと」の導入授業だつたが、それこそ一言一句も聞きも

れさせない厳しさが印象的である。

ところで、当時は軍国主義の皇国民教育最絶頂の時代で、児童も戦帽を被り、拳手の礼を交わすという校内風景だった。それで、教練的徒手体操がブームだったから、全校訓練などで無理に大きな声を出して張り切ったのが、今更のように恥ずかしい次第である。

昭和十九年、筆者は茶花国民学校に転任。時に敵は比島フィリピンに迫り、それこそ焦眉の急の思いで、学校は全体訓練、防空・待避訓練。皇国民教育の徹底を期し、毎朝宮城遙拝。各教室での大麻拝礼、敢闘精神高揚文朗唱、乾布摩擦。中学年以上の教育勅語の暗唱や謹書。高学年の宣戦の詔勅の朗読・暗唱、壕掘り協力や増産活動等。なお、全校児童の校外活動として遣族への奉仕活動や日曜早朝の健児団訓練。それに戦勝祈願として毎月の神社参拝等々。要は総ての機関は戦勝につながる手段としての存在であった。戦時の国家体制とは怖いもので、国民学校が営門に直通する教育とは。

国民学校卒業生は青年学校で教練を主とする訓練。在郷軍人は防衛隊に招集され、

島の中堅の働き手は婦人達であった。当時の婦人会員は、ズボンの様なモンペというのを着け、諸々の厳しい訓練を受けたのである。婦人会の組織は末端に至るまで行届き、命令一下活動できる準備体制であり、国民皆兵という限界にきていた。

昭和二十年早々一月九日、警戒警報が発令され、茶花校は学校での授業はできず、椅子・机を運び・シンダフ森での疎開授業となった。が、敵機に気をとられ学習は身に入らぬ状態。

無数の敵機空を覆う

同年三月一日、昼、どんより曇った日だった。空襲警報発令後、間もなく地響きするような爆音が大きくなった。と思うと、無数の海鳥が島の上空を舞うように、黒い戦闘機が空一面を覆ってしまった。私たちは、天地をゆるがす爆音に、目や耳を思いきり押えてうつ伏せになった。

それこそ万雷の如く耳をつんざき、与論島を震撼しんかんさせた。一時間余りも旋回しただろうか。我らは身も魂も徹底して打ち抜かれ、ぬけがらのように、ただぼう然として

言葉を失った。

これまで大本営から発表された「神国」や「大和魂」等の森厳な重みを、一気にゆさぶり落としてしまった。それにひきかえ敵国の膨大な物量や現代科学にただただおののくのみ。

二、初めて見る空襲

三月二十三日、平時なら茶花校は卒業式だろうに。その校舎をねらって魔物のような、四機のグラマンが次々低空して焼夷弾を投下。私達がやった擬装も何の効なく、黒煙や烈火の餌食えじきとなる。続いて商店街や集落一帯を襲い、先祖代々で築きあげた家屋が何の造作なく煙と化す。私たちは自分の生き物を見殺しするように胸を締めつけられた。那間校も同日焼失されたとのこと。

以後、毎日のように空襲。要所を挙げると、同月二十六日午後、与論青年学校、与論校及びその西部と城集落の大半焼失。四月四日には、琴平神社をはじめ、その北部一体を炎焼。平時であれば竹垣一本さえ惜しむのに、大の男がただ敵のなすままに立

ちすくむ無力さ、何と情けないことか。私たちが、このように生き残れることが、その当時解っていたなら、我々がとつた行動は、大きく変わっていただろうに……。

三、命ながらえて

四、五月は雨がよく降った。壕は水もれで泥どろだらけ、持ち出した衣類も朽ち始めたが、命が保証されない身には宝の持ち腐れ。毎日敵機の監視と銃砲声のなかで、息詰る思いに暮れてゆく。起きれば夢でなく今日もまたかと、にらむ空もどんよりと。

敵は様々な戦法で度肝を抜くことばかり。ときには、島の周囲を高層ビルのような船団が、ぎっしりと埋め尽くしたり、手さぐり農作業中、不意に照明灯で昼の様にされる等、有り難迷惑の極み。：

或夕暮れ、母とイモを運ぶ時だった。森陰のあぜ道にさしかかった際、突然グラマンが突入するかのような低空に気を失い、前後不覚でその場に倒れた。それから何分たったのだろうか。やおら起き上がった母は「アア・チュムチョイ・イキナゲーサタル・ヤリーエークトウ」（ああ、残念、命永きが故に）と、ふるえる唇は悲嘆のどん

底を見る思いだった。

「ナウンテイボ、ニヤー・ワヌムタン」(いいちよ、もう私が持とう)と、イモを拾い入れる。男って、親を慰めるには、何と頼りないことか。いつまでも大人になり得ない私だった。……。

この時、私たちは、あの世で安楽に休まれておられる先祖様を、うらやましく思うのだった。

四、「生」とは何だろう

隣りの沖縄は、四月来砲声の絶えることはなかったが、六月に入り敗残兵らしい青年たちが、よく麦屋の集落をうろついていた。彼等は糸満着を着て沖縄語を使っていたが、沖縄人でないことは解った。雨あがりの朝だった。鮮かな新緑が、くつきりと空の青に映えていた。タタタツ……と、気味悪い機銃の音の方を見た。前浜の堡礁近くまできた一その的舟が、戦闘機の機銃掃射を受けるところだった。沖縄から与論に着くのが運悪く遅れ、敵機に見つかり、旋回して何回も何回も射撃されているの

である。生身の体に何発も撃たれ、何という哀れな運命だろう。「生」とは、このように痛み苦しむことなのか。若き楽しかるべき花の命を。

「戦争にルールなし」と言われるが、人間だけではない。牛や豚等の家畜たちも、ルールなしと言わんばかりに開放され、あげくは御主人様の壕を悠々と訪問する。祝儀回りは早いぞと、殺して壕から壕へと安売りする輩やから、それをスパイだと疑う者、皆、戦争が創りなした珍風景か。

いよいよ七月が近づいて、家内はだんだん産月も迫ってきた。私たちは、自分の個人壕と深い安全な共同岩穴を使っていた。ところで、幼児やもの解りの悪い児を持つ親は、共同岩穴から別れるのが自然の道義である。それで私達夫婦は、別の小さな岩陰で襲撃をしのいでいた。その時、かねて気丈夫で、壕に入るときも大方私より後に入るような妻が、見栄みえもかまわず肩をふるわせ、大粒の涙を子どもものに流して、泣きじゃくるのだった。そうだ、お産は後二週間以内に迫っている。

たださえ身の始末に困るのに、赤子ができて、もしや敵前上陸とでもなったら。

その重圧と女の業こつの深さに、あわれを催したにちがいない。わたしは、あまりのせつなさに涙もかれ、むこの民をかくも憂き世の深淵に引き込まねばならないのか、と怒りさえ感ずるのだった。

それで、お産に備えて壕の側の木立ちの中に、畳一枚敷の竪穴式の小屋を造った。七月七日、長男はそこで誕生した。そのころ、敵が上陸するような事であつたら、私たち親子は、どうなっていたことだろう。

ところで、いよいよ戦況が悪化し、上陸が予想されると、小野駐屯部隊長は、敵が上陸した場合は、与論島民は全員、叶の梶引半田の西下に集結し、全員玉碎する旨示達された。そこで山防衛隊長は「だれが最後の一人になるまで玉碎したことを見届ける責任を負うか。」と詰問し、小野隊長は明快な即答が出来得ず、機嫌が良くなかつた、とは山市郎先生の言である。

では、当時の駐屯軍は、どうだったかと言えば、彼等はピャー又半由のウフサフの非難壕にこもって、一発も撃たずに終戦を迎えたとのことである。弾を撃てば逆に集

中攻撃を受けるからだろう。

八月十七日、戦争は中止になったとの噂が伝わって来た。こうして八月十五日、大日本帝国の無条件降伏は事実となった。「神国日本」「ただ一度も敵の侮りを受けた事のない日本」と教え込まれた日本は、本土で最後の一兵に至るまで戦うと信じきっていたから全く心外だった。

特に当時代は、国状の内面に関しては、一般国民は目隠し状態で無知にされ、とりわけ軍や官僚に対しては、極めて微弱な存在だった。このような政策が地球上から永遠に消え失せるよう祈る。

五、世変わり 世直し

こうして、あちこちの森から姿を現した島民の、永い壕生活の疲労はかくしきれず、青白くやせ細り、実に敗残者にふさわしかった。皆、どたん場の苦しみを味わい、命拾いはしたものの、者の身着のままに近い状態で、衣食住にわたり無一物に近い生活であったから、原始的な生活から始まったのである。空襲当時は、命さえ助かればと持

ち物は、さほど気にならなかったのに、今は、その失った物が欲しくなり、その取り返しのために苦勞の連続だった。(1) まず、我が家の焼け跡の整理、(2) 農作場への踏分道の復旧、(3) 雑草の伸び放題に田畑の開墾、(4) 作物の植付け、(5) 自家の堀立仮家の建築、(6) 親族・近所の家造り、(7) 官公所の建築等、夜を日について働いても常に時間不足で「貧乏暇なし」を身をもって体験した。

さて与論の三つの国民学校の入学式は、焼けトタン整理から始まった。が、はたして日本人としての教育がなされるだろうか、と不安の毎日だった。父兄は子供たちを明盲にすることはならぬ、と起ちあがった。それで、学校は青空教室での授業から始まった。何しろ焼け跡の子供たちで、学用品なしの児も多く、そんな児はセイロンペンケイ（ダウンブイグサ）の葉にソテツ針を鉛筆代わりに使用させた。黒板は焼けトタンである。

茶花校は、当時の教頭であった竹下茂徳先生が、その情況を見かね、堀立長屋仮校舎建築を思いたち、高等科二年男子生徒（阿野三雄氏同窓生）と私達職員を先導し、

骨組みを組み立て、屋根葺きは校区民でなされた。当時、先生は四十二、三才ごろで持前の「口八丁手八丁」を存分に発揮されたことと、今は亡き先生の偉さを偲ぶことである。与論戦後の教育史上特筆される功績である。それから、五、六年後の屋根葺き替えの際、屋根の朽ちたカヤの中から蛇が這い出て、騒いでいた情景が昨日の様にまぶたに浮かぶ。そのころの教員は惨めなもので、米二升代の月給と言われ、アメリカ払い下げのHBTと言うだぶついた服を着け、芋弁いも持参だったから、止むなく退職者も出た。

教育内容として国家主義。軍国主義的教材は、削除するよう徹底されていたので、その箇所は、墨で消して使用したのである。教科書は上級生のお下がりの古本だった。私たちは、すべてアメリカの逆鱗げきりんに触れないように心がけ、特に茶花校は港に近いだけに、米人の不時の訪問を恐れ、校門にはよく気を配ったものである。世界に冠たるを誇った帝国日本の敗戦後の姿である。

終戦直後は、授業が終わると、職員も下校して自家生産に励んだ。そのころの公務

員は、自宅の衣類を一着ずつ食物と交換するという「竹の子生活」寸前の暮らした。た。

世が世で「無い袖は振れぬ」の例で、家造り作業の食事さえ、ソテツ飯やカライモ等を出すのが普通だった。こういう時世に、アメリカの放出物資として、メリケン粉やかん詰、ラード油に作業服、オーバや毛布等の無償配布は、日照りに慈雨のようで、大変喜ばれた。こうして日本全国に、恵んでくれるアメリカの偉大さに敬服したものである。

しかし島民は、このアメリカの慰撫政策の後に来るであろう、指令に常におびえていた。その悪夢が「奄美を母国から裂く」という昭和二十一年の「二・二宣言」として実際に現われた。続いて国旗掲揚、国歌演奏の禁止。なお、日本紙幣はB軍票と交換になる等、次第にアメリカ世ゆに変わる。

こうして本土との交易は不能になり、島の復興は遅々として進まず、昭和二十四年になり僅かばかり余裕ができ、初めて運動会を持った。（これは父兄の弁当持参との

関係が深いのである。) 天幕なしで来賓席だけカヤ天井。マイクはメガホン、出発合図は白旗である。当時、フィールドと外野の境は杭を打って縄を張るのだった。若い教師が運動会準備で半ズボンだけになって、懸命に杭を打っていた。ところが、くすくす笑っていた手伝いの児童たちにも気付かず、力いっぱい打ち込む。その度に、ズボンの裾から、出てきた越中フンドシの先が、ひらひらとくるぶしあたりをひらめいたとたん「いや、いけない。このわからずやめ、」と、急に向きを変え、あつという間に正常に復し、手品師みたいに、にやりと、そ知らぬ顔。戦後の校内に開いた愛嬌の一幕だった。

六、明るい世代へ

とかく戦後は様々な重圧が寄せて来る世代で、その制約をひとつひとつ解き、日本復帰という大事業を達成させた。その先人達の労苦は測り知れない。それに皆が、それぞれ分に応じて出来る限りを捧げたお陰で、名実共に真に「日本国民」になりえた。有り難い極みである。

つらつら思うに、日支事変以来、ながいながい人災だった。しかも空前絶後の国難をしでかした。私は、あの夏のセミの声を聞くと、当時、壕の上の木で盛んにないていたセミを思い出す。

シャン シャン シャン

たくさんのセミたちよ

わたしの夏を見にきたの

おまえたちは

ながい地下の暮らしで

五十年前の話聞いて

みんな連れだって

わたしに何を言いたいの

ああ、そうか。「あの何百万の犠牲者の霊が 『あんな戦争は二度と起こさないでく

れ。』と、「声を殺して泣いていた。」と……。私は思うのだった。「あのおびただ夥しい人命と

財によつて購あがなった、民主主義の国政と開放された日本歴史を尊重し、再び子孫を戦場に送らぬよう誓うのだった。

戦後五十年・わたしの体験記

茶花 川上末吉（八十五歳）

一九四四年（昭和十九年）七月二十六日、私は軍の充員召集を受け本村からの応召兵四十名位（確数不明）と共に沖永良部の和泊村にある球第七一五六部隊吉岡部隊清木隊に入隊しました。

当時の部隊本部は現在の和泊商店街の西方約五百米位にある農業会の倉庫を改造した長屋式の兵舎でありました。幾日か過ぎた頃部隊は内城小学校の校舎に移動されました。

私は昭和六年の徴兵検査で丙種合格となり、国民兵役の身分であり、こんな小さな

体で召集等受けるとは思いませんでしたし、留守の幼児三名の養育が心配でしたが、一方では私の兄弟五名は既に出征、殆ど前線で活躍し、ただ島に一人だけ残された自分までも召集を受けた時、私も男の中の一人であったかと喜んで入隊し兄菊六名とも揃って軍に奉公出来てこれ以上の光栄はないと思いました。しばらくしている中に私達の第二小隊は小野隊長以下与論島守備の命令を受け私は飛び上がる程の嬉しさでした。

昭和十九年六月二十七日与論島守備のため清木隊の第二小隊小野隊長以下四十四名の先発隊が来島、続いて八月に私達第二班三十名位（確数不明）が来島して総勢七十名から八十名（確数不明）で与論島守備に当ることになりました。

歩兵が主力で通信班、衛生班の混成でありました、最初は野砲隊も来島していたがしばらくして引揚げたようでした。

昭和十八年六月新築落成したばかりの青年学校々舎が軍に提供されました。

守備隊の隊長は小野一真少尉（山口県出身）で副官は有田次郎曹長（広島県出身）

で私は第三分隊の中島分隊長（山口県出身）の下で本島出身者では林義隆兵長（那間出身）他五、六名と他は山口県出身でした。

私は三十四才の応召兵で最初から厳しく鍛えられるものと心配しましたが、応召前の職歴を認められ副官の有田曹長の下で、部隊の經理、給与、庶務、等の内勤を命ぜられ割合楽な生活を送ることが出来ました。

昭和十九年十月十日、与論島に初空襲、午前十時頃、米軍のグラマン機二機が東方海上から来襲疎開者の引揚荷を満載して茶花港内で出港待機中の村営船与論丸（五十五t）が機銃掃射を受け村民は大きな騒動になりました。私は丁度炊事当番で兵舎の飯炊場で昼食の準備をしていました。

守備隊の任務は最後に敵の上陸した場合を想定して九七高地一帯に多数の散兵壕を又益山政喜久氏宅の南西方に長い深い戦車壕を構築し最後は三角点西方下のウプサプ松林の中に隊長壕とそれに全兵員が収容出来る堅固な長い坑道壕二基が構築されました。昭和二十年三月以降空襲が激しくなり、茶花市街地を初め全島の公共施設や民家

が次々焼失されたら守備隊はただ陣地の壕の中に閉じこもっていて、沖縄本島と与論島の中間に於ける空中戦や島の周囲をとり巻いている軍艦から発射する艦砲射撃を見ているばかりであった。敵の飛行機は私達守備隊の陣地の上空を何回となくすれすれまでに低空して襲来したが、小野隊長は我が方からの射撃命令は一度も下さずただ壕内に隠れているだけだったので敵も守備隊の陣地のあることを知らなかったからか一度も攻撃を受けたことはありませんでした。後日聞いた話では臆病隊長だったこの風評もあつたが当方から発砲したら却って攻撃的になり大へんなことになるとも言われ小野隊長には全島民が感謝していました。

最後に構築した陣地の壕は立長集落の松林所有者からの無償提供と島の防衛隊を初め村民多数の協力のおかげで完成しました。

昭和二十年八月十五日、戦争は遂に敗戦終戦となった。私達守備隊は幾日か過ぎた頃に壕内生活を出て足戸集会所（現朝戸自治公民館）に移動することになった。

終戦事務引継其の他の用務で沖永良部の清木隊本部に出張を命ぜられる。先ず隊内

から刳船操作に経験のある優秀な兵員十名を選抜、全員本島出身者でその中には元追込網漁撈長の梅花高島古兵等でした。島内から刳船二隻を用意し九月十九日早朝大金久海岸から知名村小米港に向け漕ぎ出した。一隻に五名宛の漕手、それに副官の有田曹長と私が分乗した。私はかねてから船酔いがひどく然かも刳船等乗った経験はありませんでしたが上官の命令であり、その上守備隊の経理事務を担当していた関係で同乗することになった。私も漕ぎての一人として港内では漕ぎ初めたが百合浜附近を通過して外海に出る頃には風波が高く大時化となり私はすぐ船酔して吐き出し寝込んでしまい高波をかけられてずぶぬれとなったが他の漕手は流石に海に達者な男ばかりで五時間程で漸く目的地の小米港に着くことが出来た。二隻とも小米港の陸上高台に繋留して越山の部隊本部に行っていた時、その晩台風が襲来して二隻とも高波にさらわれてなくなり私達は帰隊の足を奪われ騒動し早速刳船さがしを初めることになった。丁度運良くも沖縄からの逃亡兵が乗り捨ててある刳船二隻を伊延港で発見、陸路和泊潜まで搬送して和泊港から大金久海岸へ向けて漕ぎ出し無事に帰隊した。

昭和二十年十月十三日、与論島に初めて進駐軍が上陸。私達守備隊は足戸集会所に於いて全員武装解除となり、本島出身兵士二十三名は他の出身者よりも一足先に召集解除となり、現地解散を命ぜられ復員することが出来た。

僅か一年有余の軍隊生活であったが、私にとっては一生の思い出になりました。

特に本島出身者の家族は空襲が下火になった頃からは月夜を利用して陣地の下の県道に黒砂糖や麦のハツタイ粉等を持参し慰問旁々面会に来られた時は何より嬉しく思いました。

又守備隊の来島当初から小野隊長の命令一下、軍、官、民が一体となつて戦争完遂に努力し協力されたこと等永久に忘れることはありません。

あの構築した多数の壕跡地は五十年を経過した今日では何の名残りもなく、鹿児島県の畑総事業のおかげで立派な耕地に変わり感謝しているが、あの松林の中の三基の陣地はその後崩壊しているものと思いますが、あの下の県道は通っているものの一度も覗いて見たことがない。

私の調査では終戦時の本島出身者は、茶花の池田誠三・前田文三・川上末吉・立長の出村繁雄・川畑平国・城の赤崎重徳・堀江常德・立政助・足戸の徳村里、西区の花高島、益田高島、酒匂盛栄、東区の鬼塚高太、鬼塚池実、山下喜見富、富岡氏、那間の林義隆、池田中福、山田直村、そして島外から、東菊山、林政鶴、竹原城、町茂夫の計二十三名のようでしたが、五十年を経過した今日では島内居住者は杯義隆、池田誠三、徳村里、梅花高島、川上末吉の五名である。

南海日日新聞社は今年も戦後五十年のあゆみ戦跡を語ると題して大島郡内各離島の戦跡を掲載しているが、沖縄戦場に最も近い私達のこの与論島にも太平洋戦争の名残りとしてあの松林の中の三基の陣地跡を開発して、標識を建てて、二度とあのような悲惨な戦争があつてはならない為にも、島のある限り後世に島の文化の一つとして永久に保存していききたいものである。

平成七年八月

私の戦争体験記

与論町古里 竹園茂光

大東亜共栄圏をつくるという美名を掲げ、当時の軍国主義者が起こした第二次大戦。その後昭和十八、九年は我々にとつても十八、九歳、今では青春真っ盛り、高校卒業後の年代であつた。全く異なる時代で男性といえただ軍人になれるのが誇りとされ、愛国心に満ちた時代であつた。

でもそれは、戦地に行きその戦争の恐ろしさ、悲惨さを知らないものの心境であつた。時に大東亜戦争の末期沖縄戦。昭和二十年三月、米軍が沖縄に上陸を開始して以来与論島も島を揺るがすような砲弾の炸裂音、すさまじい爆発音と真っ赤に染まった沖縄本島の上空を見たとき、これが本当の戦いだとの実感であつた。

その頃より与論島にも毎日のように空襲が行なわれた。我々が通つた小学校や青年学校も相次いで空襲により炎上焼失した。また、我が家の隣家も焼夷弾攻撃により焼失、いつ我が家その攻撃にさらされるかと思うとき、居ても立つてもいられない毎

日であつた。

我々は、自宅への爆弾投下を恐れ、海辺の岩場を避難場所を選んだ。それから毎日、日が避難場所通いの生活であつた。それは老いた祖母、病弱の父母がいたからである。幸いに岩場には五、六戸、約三十名程収容できる場所であつたので、みんな申し合わせたように集まって共同生活が始まつた。日中は空からの攻撃があるために畑仕事もできず、ただみんな寄り集まって身を隠し、空からの攻撃に備えるだけの日々である。身軽な私は家族の食糧調達で苦労した。

その時の私たちの食料といえば、早目に刈り取れる小麦であつた。夜間刈り取つた小麦を挽き臼で粉にし、芋の葉や野草の莖、ヨモギ等と混ぜ合わせた雑炊であり、これだけが毎日の食事であつた。時々見かねた隣の人達から分けてもらったお芋のおいしかったこと、いつも食べ物に飢えていた私にとってあの芋のおいしさは今だに忘れない。

その岩場より外に顔を出し海辺をみると一瞬体が凍る思いがした。リーフの近くよ

り今にも上陸しそうな敵艦が行ったり来たりしている。はじめは、まさか敵の船とは信じられない。日の丸の旗が無いのに気づかなかつたからである。今日の夜は順番が回って、海岸の防備のための当番の日である。島の防衛隊と共に、島の回りの敵の上陸地点と思われる地点の防備に当たっていた。竹槍一本携えて行ったのであるが、幸いに上陸は行なわれず命拾いをした。

いよいよ戦いも終わりに近づいた五月、避難所から戻り疲れた体を横にして一眠りしたかと思つたとき、キューキューと不気味な機銃音にはっと飛び起きて外に出た。

見ると我が家の真上と思われる辺りで「ダダ、ズドンズドン」、空中戦である。しばらくするうちに「パタパタ、ズドン」と大きな機銃の音とともに「ガタガタ、ゴゴン」と大音響。「ズシー」又も無気味に大きな火の玉が我が家の南側に落下していった。

さらに大きな火だるまが反対の方向に流れ落ち、それはしばらく地上で炎上していた。身震いする体、ガクガク震える足、ただ呆然と立ちつくしていた。しばらくして我にかえり我が家に帰つたが、悪夢のような一夜で眠れぬまま朝を迎えた。

夜明けとともに避難所へ急ぐ。岩場のところで昨夜のことを皆ではなしあっているところへ親戚の叔父が来て、昨夜の空中戦で飛行士が落下傘でおりて戦死しているよ
うだ、との知らせがあった。しかもそれが日本の特攻士らしいとのこと肝をつぶす
想いである。

その日は特別に空襲も多く長く続いていて、日中は確認にも行けず焦る気持ちを迎
え夜を待った。本当にあの空中戦で落ちた飛行士なのか。無敵と言われた神風特攻隊
員なのか確かめなかった。

夜九時頃、小さなカンテラの灯りと数人の人達が、ひそひそ話をしながら墓地に向
かっていた。あの特攻隊員の埋葬のようである。その頃夜の照明は敵機の攻撃を恐れ、
許されなかった。食事の準備をするにも外で空のようすを確かめながら行なわれる始
末である。

後ほどの話で、昨夜埋葬されたのは日本の特攻隊員で、飛行服のネームからわかっ
たのであろう「菊池兵曹長」と判明、沖縄への特攻の使命を受け戦場へ向かう途中の

出来事であつたのではと思われる。与論島の守備隊や防衛隊の人達によって埋葬されていた。明くる日早々墓地に行き、葬られた状況を見て激しい憤りと悲しみを覚えた。

戦況は益々悪くなり、敵の上陸こそないものの艦砲射撃と空襲は連日つづいた。

それから幾月か経て戦いも終わりに近づいた頃、海岸に近い我が家には沖縄戦で追いつめられた日本兵が五、六人幾組かに分かれ、小船に分乗して近くの海岸に辿り着き休息を求めて来るようになった。敵艦の照明弾に悩まされながら、手漕ぎの小舟で何時間もかかって着いたのであろう。これから徳之島の守備隊へ行く途中とのこと、ずぶ濡れの軍服、無残な姿は、ああこれが神国日本と言われた日本軍の姿かと胸がしめつけられる。よれよれの軍服をまとい自決のために残されたという手榴弾と軍刀、他には小銃一丁も無い。まさに逃亡の姿であつた。

兵隊達は私のポ口屋のカマドを前に、ずぶ濡れで冷えきった体を暖めるかのようにうずくまっていた。その目の前には小さな鍋があつた。フタをあけて見ると細い小芋が少し残っていた。今日一日の我が家の食料である。でも物欲しそうなやつれた兵士

の目をみたとき、胸にこみあげるものを感じ、その小芋を一つづつ皆に分けてあげた。余程腹をすかしていたのであろう、むさぼるように一口一口たべていた姿はいつまでも忘れない。

兵士達は、休む間もなく小隊長と思われる若い将校の命令によつて次の行き先徳之島への出航準備へと出かけた。しかし沖合には昨夜の敵艦が待っている。海岸の人影を見て早くも艦砲射撃がある。幸いに砲弾は陸地の遠くに着弾、私達への被害はなかった。敵艦の去るのを待つて出航して行くのをただ無事に目的地に着くのを祈るのみであった。

その一行の消息は後になつてもわからない。

いよいよ終戦も真近、八月真夏の著さの中でおかずの「クサビ釣り」に出掛けた。上空一面数百機の飛行機の群れ、なんだか異様な感じであつた。

急降下して飛行機が飛び去つた。やはり敵機グラマンである。機銃掃射はない。

その日の正午終戦の詔勅が下つた。全く夢にも考えなかつた敗戦の知らせ、いまま

での戦いそしてあの苦しみに耐えてきたのは何の為であったのか、戦争によって失われたものの大きさと虚脱感に生きる術を知らされない日々が幾日か続いた。

あの苦しい過去の追憶の中で、休息を求めてポ口屋に辿り着き母の作った粥を涙を流しながらすすっていたあの傷ついた兵士、その後百合ヶ浜付近で病死したと聞かされ、その兵士の後姿が思い出される。また何よりもあのすさまじい空中戦で若い命を散らした特攻隊の兵士のことを考えた時、生き残り命ある者が我々のために無念の死を遂げた者へ償い報いることが大きな使命ではないか、一つの忠誠心みたいなものが湧いてきたがなかなか考えが頭に浮かばない。

飛行士の墓地にいつてみたときふつと思ひ浮かんだのがいくつも目の前に並ぶ墓標であった。他の祖先の墓標の多くは海中の石灰岩でできているのに気づき、それから一カ月はその石碑造りに熱中した。ほんとうに生きがいのある毎日であった。一日一日形が整い、その名前を刻み込むことができるようになったとき、菊池兵曹長に尊敬の念を込め刻み込んだ。出来上がったときの喜び、若い同士の者達を集めて建立を

終えた。

あの石碑も時の流れとともに、今は探し当てることもできず感慨ひとしおである。
あの忌まわしい沖繩戦、九十日にも及ぶ激しい戦い。何のための戦いであったのか。
二十五万人以上にも及ぶ尊い生命を失い、何一つ得ることのない戦争。その時を生き
てきた者として言えることは、この世界に二度と戦争をおこしてはいけないとの願
いの一言に尽きるところである。

思い出せば

嶺 島 峰 永

わたくしは、大正十一年、当時の茶花尋常小学校に使丁を拝命、二十五年有余、当
時の体験と思い出の一端を述べてみたい。

当時の教育目標は、たしか礼儀作法規律正しく、つまり、教訓の具現ともいうべき

か、その基調をなす道徳教育を中心に、基本的生活習慣の形成と豊かな心、強い心できりぬけ、飲まず、食わず苦勞難儀は身のため、世のため、人のため、生涯学び続け、働きつづけていくことであつたと思う。

当時の校長、猿渡章氏を始め、歴代の校長や諸先生方の下に共に汗して、児童生徒の健全育成のため、微力を尽くした感がするものであります。今更、感慨無量禁じ得ないものがある。時代の変遷発達によつて、尋常小学校から国民学校へ、そして小学校と校名が変わり、学校教育方針も時代の要請に逐年改善が図られたものの、窮乏な村経済のため、学校予算は、人件費を除き、消耗品費が一六〇円、備品費二〇〇円、給食費七〇円、奨励費七〇円、その他雑費等で、極めて困窮な乏しい予算状況にあり、このため、予算不足を補填し学校運営に資するため、永野平四、南文治、両氏の田畑を借用し、学校農園として牛に鞍を掛け、鋤を用いて、高学年生には農耕の指導と並行し、野菜大豆、米、等々の農作物を作り、生徒に勤勞意欲と収穫の喜びを体得させるとともに、農作物を売り捌き、学校運営費に充てる一方、売り残りを卒業生に分配

して喜ばれ、真に農業に対する理解を活立てるものがあつた。また、当時は勿論現在のように、水道施設がなく、茶花地区にも井戸は数箇所しかなく、中でも自宅前のユンタゴーは井戸が浅く、水質が良く泉豊かで、島中の人々が水汲みの集合場所でもあつた。わたくしは、この井戸水を毎日タングイ桶を前後に天秤棒で担ぎ、一日七〜八回、月夜には夜業で十時まで十八回、学校の水タンクと井戸の往復の毎日であつた。また、当時は衛生面に乏しく、女生徒は不潔のせいか頭に蝨が寄生して瘡ができ、特に低学年生に多かつた。このため私は蝨の駆除に島内産の葉煙草を買い求め、水で揉み潰し、その汁を頭に揉み込み約三十分程風呂敷で包み、その後櫛で取つたことも少なくなかつた。終戦後は、ほとんどDDTの薬剤が蝨や蚤の駆除剤として使用したものであつた。

退職後は、一世紀の四分の一を学校の駆走り役として、勤めさせていただいたことから、補導部長を命じられ、春、夏、冬休みは小中学生三十名を率いて、毎朝午前五時農協前に集合し、ウイリヨー、キバリヨー、ヨイサー、事故には強感と声掛け運動

を展開し、立長一班から、茶花地区をまわり終点、イチヨーキパンタでラジオ体操を
行い、その後合唱する。

起きよと人に 呼ばれる先に

床独起きよ はね起きよ

朝風清く渡れる枝に

鳴く鳥の音も おもしろや

互いに励まし陽気に進む

ともども暮らして善し悪しさぐる

これこそ誠の正しき友よ

これこそ誠の正しき友よ

合唱のあと海水浴、交通事故木登り等の注意など、両親の教えを守り勉強に励むようにと話を結んで解散。この行事を七年間続けてきました。これも一重に、諸先生方はじめ、地域社会の皆様のおかげの賜だと深く感謝しているところであります。

人間が生きるといふことは、どういふことかといつも考える。すると死ぬことだといふことに帰着する。死ぬとわかれば、今日この一日を十分生きねば損だと思う。

老齢で、身体が不自由のため、ひたすら寝台の上で、国、県、町ご当局の暖かいご援助に対し、心から感謝しながら、永遠の島の発展を祈りつつ、暖かい家族の介護を受けて暮らしております。

有難うございます。

・我は神の子うれしいな

・朝に希望 昼に努力 夕に感謝

・上見て進め 下見て暮らせ

・真剣の前に不能なし

- ・ 論で負けても行いで勝て
- ・ 長所と交われば悪人なし
- ・ 話し上手より聞き上手
- ・ 己れに勝つて人には譲れ
- ・ 急ぐな休むな怠るな
- ・ 向上の一路に終点なし
- ・ 仲良く働け笑って暮らせ
- ・ 仕事は抱いて眠る覚悟
- ・ 先ず働いて財源をつくれ
- ・ 百の考えより一つの実行
- ・ 幸福を働きの中に見出せ
- ・ 万物を生かす工夫
- ・ 心に植えたる者は幸福

- ・ 機知は人命を救う
- ・ 収入は器に見つめること
- ・ 出すものは笑って出せ
- ・ 生き甲斐のある生活をせよ
- ・ 金の成る木 正直 早起き 働き
- ・ 金の散る木 短気 嘘つき まごつき
- ・ 希望は人をこの世から導く光明である

(以上)

情報通信関係

与論町茶花 遠山哲治

昭和十八年二月、卒業したら与論局に帰って来る条件で、裾分政治君と二人与論丸

で沖縄本部港に渡り、木炭バスに揺られて七時間、那覇を経由して名瀬で熊本逓信講習所を受験、明けて十九年三月卒業時に与論局に欠員なく、帰れぬくらいなら都会生活もよかろうと、第3希を大きい局と書いたのが運のつき、遠く九州の果て門司局電信課勤務を命ぜられ赴任したのが二十五日。

当時は何処も同じで電信課の定員九十名に対し、応召されあるいは軍属として出て行かれ、残っているのはわずか五十名たらずで早速実務につかされ、「へボ変われ」とののしられながら現業生活にも慣れ、朝十時から夜十時までと日勤、夜勤の交代勤務につき、時間通り帰れたためしもなく、夜勤ともなるとそろそろ仮眠をと思う頃、受付から上がってくるのは早朝までに宮崎の新田原航空隊に届けよとの作戦電報で、暗号の数字ばかりをならべた、しかも長文、それが十通はよい方で二十通、三十通。

タタキ終わる頃白々と夜が明ける繰り返して、六月と八月、北九州一帯に空襲があり、食べるものと言えば得体の知れない粉で喉を通せば咳き込み、ダンゴにしてようやく腹の中に納まる代物が主食同然で、欠員ができたから帰ってこいとこの連絡を受

け、転勤願いを出したらソツケなく断られ、逓信局長命令で門司港駅を後にしたのが二十年一月二十五日。

座る席はなく列車の連結器の上に立ちつくして十二時間、鹿児島叔母の家に辿り着いたのが夜半。

居候すること十数日、船団で古仁屋まで行くという琉球丸に乗り、名瀬、徳之島とポンポン船に乗り継ぎ、市来加平さんに迎えられ茶花の浜に降り立ったのが二月二十八日。

その時与論局はすでに民家を借りて疎開しており、通信機器のみが残り、外に電話機が監視哨と接続されており、爆音の都度送られてくる情報を名瀬に送り終える頃、奄美地方、鹿児島地方に空襲警報が発令になり、飛行機はその頃帰って行くといった状態でした。

公衆通信は一日に一通あるかなしで、その他の情報が日に四十〜五十通、後は役所間の連絡事項のみで一ヶ月足らず過ぎる。三月二十三日午前十時の通信中、突然うし

ろから局長にひっぱられるようにして三十メートル程離れた防空壕に入ると同時にバリバリという音とともに入り口を機銃弾がかすめ、二人とも寸秒にして命拾いをしたこともありました。

飛行機が去り、帰ってみると配電盤の機器はメチャクチャ、送信機は用をなさず、受信機の真空管はフツとび跡形もなく、それ以来明けて四月二十日まで無線通信は途絶えることとなりました。

街のあちこつちで煙が立ち込め、ワラゾウリに水をかけ焼け跡を駆けまわり消火に務めるものの手のほどこしようもなく、残った局舎と我が家をあとにし、他の皆さんも書類を郵袋に入れソテツ林の中に隠し、最寄りのところに各自疎開することにしたのが明けて二十四日。

五月頃までは仕事もなく、天気の良い日は雨に濡れた書類を干し、飛行機の来ぬ間に芋を植え、爆音がするとソテツの中にかくれ、首だけ出してその数をかぞえ、爆撃のようすを見物し、退屈をまぎらわしていたが、五月も終わり頃になり軍の蓄えもな

くなつたのか、何とかしてお金を集めてくれとの軍からの指示で、夜叶の集会所で毎週開かれている村と農会との常会にあわせて貯金を扱い、軍の要望にも応え、給料もいただき、ちよつとした贅沢気分を味あうことができました。

その後叶の民家、山マルおばさん宅（後の那間校長山西勝先生の留守宅）を借り、二人一組で泊まり込みで貯金を取り扱い、空襲の合間に一人来、二人来してみんなの憩いの場となり、終戦で元の茶花の民家に帰るまで続けました。

やがて茶花に移転（現在の川口村信さんの屋敷）し、貯金保険を取り扱い、いつ届けられるかもわからない郵便物を引き受け、名瀬まで郵送を条件に電報も引き受け、いつ来るかわからぬ船を待ちました。

そうこうするうちに徳之島の軍から突然、経理担当の多田大尉が来島、復員したみなさんを集め、未払い分の給与を貯金にし、いくぶんお金が入り潤いを与えてくれました。やがて十島丸が鹿児島からの引き揚げ者に乗せて来、ポンポン船も次々と来るようになり、局も焼け残った局舎に移転することとなって十一月十二日引越はし

たものの屋根は穴だらけ、天井には機銃弾がゴロゴロしており、雨の降るたびに周囲から拾い集めた古トタンやダンボール、板切れで屋根に上り、天井に登りして両方からの応急修理する有り様でした。

明けて、昭和二十一年四月、赤尾木無線送信所から、勢秋三工務員と山工務員が海軍払い下げの無線機を持参し、十日程かけて十五メートル位の木柱を建て、二十日一年と一ヶ月振りに無線通信を再開したのはよいが、第一報が戦後の行政整理第一号、古参の職員、年輩の職員から次々と整理され復帰時にはわずかの名になってしまいました。

昭和二十三年と言えば村長選挙があつた年ですが、五名の方々が立候補され選挙用のハガキが足りず急遽電報で請求し間に合わせるといふ慌ただしさで、差し出された郵便物を見て驚いた外務員の一人が、局長の出局する前にそつと辞表を置き退局するという一幕もあり、小学校を卒業したばかりの少年を雇い、先輩の外務員に夜通し区分をお願いし、三名で配達に出る毎日、配達から帰りワラゾウリをつくり履いて出

れば帰りは裸足同然の姿。

その年に足戸局が集配局に昇格し、坂下の竹内さん宅を中継地として両局から郵便物を運び交換する仕組みであったが、復帰により足戸局は元の無集配局になりました。

昭和二十五年には長男が生まれた年ですが、家族手当がつくわけでもなし、分娩手当がでるわけでもなく、給料わずか五百四十円也。その年の十月郵政関係だけが一足先に琉球郵政局に統合され、給料が一挙に二、一〇〇円の辞令を手にした時の喜びは生涯の思い出の一つです。

二十七年には対日講和条約があり、十島村だけが先に日本復帰し、その後沖永良部と与論だけが切り離され、徳之島以北は復帰するとの噂が流れ、何故に帰さぬエラブとヨロンという唄が流行したのはその頃。二十八年になりますとポツポツと復帰の話が聞こえる中で希望によっては内地に転勤できるようになり、松山俊文さんが沖縄經由で東京に出て行かれたのが四月二十日。

その後は一人で通信を担当し、家では叔父の葬儀をしながら休むこともできず、日

曜祭日なしの勤務が続き、いつしか復帰も具体化し、クリスマスプレゼントと言う話もありながらも、どこまで信用してよいのやら。

十二月二十五日早朝、宗谷丸の雄姿を品覇の沖に見た時には思わず万歳を叫び、やがてハシケから下ろされた一億六千万円を十六個の箱につめ局内に運び込み、郵便局の担当官木庭義治氏とあいさつを交わした時、はじめて復帰したのだという実感が湧いたものです。

それからが大変で、局の周囲には青年団と警察官が二十四時間警戒にあたり、その中で日本円とB円の切り替えが始まり、日本復帰祝いと年賀電報が一日に二百数十通、それを一通毎に翻訳しなければ配達出来ず、警備の中田隈吉、沖大和両警官に翻訳をお願いして配達に回すという忙しさ。

長男が生まれたというのにゆっくり祝いもできない叶兄と二人で、お金の入った木箱を敷布団がわりにして泊まり込んでの生活が一週間も続いた。

あの時、あのようにして扱った電報に不達、間違いはなかったらうか、時折思いだ

し、夢に出てくるのは無心にたたく電鍵の思うように進まぬもどかしさにハット目が覚めるのもしばしばです。

二十九年七月には外務員に二人増員になり、三十年には内務、外務にそれぞれ増員になり、したがって仕事の量も増え、活気を取り戻し三十三年には電話交換が開始され、沖縄返還運動が始まり、前日になりますと各新聞社の記者が新聞電報発信のため局の窓口につめ、支援の労働組合員が集まり、局内は夜通し賑った。

遠山哲治 事務員 命ス
 日給金壹円参拾錢ヲ給ス
 昭和十一年 三月廿三日
 門司郵便局

令 辭
 奥崎郵便局 遠山 鉄次
 月給五百四拾圓を給する
 一九四九年 十月二十一日
 臨時北部南西諸島政廳

遠山 鉄次

事務官補に任命する

月俸二千五百圓を給する

一九五〇年十月一日

琉球郵政廳

私の戦争体験記

与論町城 籠 園 福 秀

昭和二十年二月二十八日、茶花国民学校に拝命され、戦闘帽をかぶり、新任のあいさつをして教職の道にはいった。

その頃から情勢は厳しく、学校での授業は難しく、セン迫の（マンクギ山）私の土地に机腰掛けは全部運び出し、疎開しての授業がなされた。三月に入ってから児童は休業状態であった。今まで経験した事のない空襲警報がひんぱんに出される。その都度茶花小学校の東側に一段上がったところにそれこそおそまつな防空壕をほり、上にすこし土をかぶせた穴である。そこへ七、八名の教員がはいり込む、野口才蔵先生の指導で両手で耳と目をふさげということでした。職員は学校に出て、学校の見張り、貴重品を外で耳や目をやられないためだという。職員は学校に出て、学校の見張り、貴重品を外に出して、いつでも火災に向けて対応した。三月二十三日は予期していた空襲があり茶花市街地は火の海と化した。茶花小学校の西側にカヤ葺きの家があり、それが図書

室であった。故竹下茂徳先生が教頭時代である。嶺峰永さんと二人、屋根に登り、飛んでくる火の子をはらいおとし、燃える屋根を棒で打ち消し奮闘したがどうしても手におえず、竹下先生が、もう下りると下から大声で呼ばれた。それで嶺峰永さん二人下りて燃え広がる図書室をぼうつとながめていた。その時、嶺さんの家も燃えているのに嶺さんは自分の家に帰ろうともせず、家は全焼させてしまった。

職場を守ろうとする職責感というか、人間性というか、嶺さんの遺徳というのはすばらしいと今だに忘れられない。

学校は全部焼き野が原になり、学校の機能は停止してしまった。子供たちは休業、職員も家で待機していた。

学校で大事なものは御神影（天皇陛下）のご写真である。それを富敏男さんの土地、学校より五百メートルのところの人里離れた畑の片隅に畳二枚敷ける穴を掘り防空壕として御神影を安置して、平兵一校長、高井高森先生、赤地才ト、田畑千代二人の女の先生は知名町からこられていた、私と計五名、防空壕暮らしをはじめた。

食事は、富苗姉さん（現山下苗）が五名のための食事を作って食べさせてくれました。

その頃の食料というのは、米は一粒もないそてつガユといもが食料であった。現世のように店に行けばなんでもある時代ではない自給自足である。

苗姉さんも年老いた嶺澄じいさんの世話をみながら、私共五人の食事まで面倒見て、小言一つ言わず、いやな顔せず、世話してくださった気持ちは、一生胸にきざみこまれ忘れることはできません。その頃は、牛、山羊、鶏、みんな焼き出され、住む家を失い、セン迫山（マンクギ山）に集まり放牧状態であった。誰の牛か、山羊か、鶏か分からない、それで五、六名で組を作って牛を殺して分け合ったり山羊を殺して分け合って食べて、その日その日の暮らしをすることでした。誰一人として、明日ある命とは思わない、その日を過ごせば満足である。

私は、家も焼かれ、家財道具も殆んど失ってしまった。

八十四歳になるおばあさん二人をかかえて、現石仁のバス停の側に石のほら穴が住

まいであった。

五メートル出ると石仁半田があり、そこに立てば、茶花一帯、立長一帯、沖縄の爆音、もくもくと燃え上がる煙、編隊を組んで本土にいく飛行機が目前で飛び回っている。

供利沖から茶花の沖合まで、毎日のように停泊している軍艦、日本の軍艦とばかり思い込んで、まだ日本は大丈夫だ、軍艦が待機しているとばかり思い込んでいる矢先に一隻の巡洋艦が江ヶ島の港まではいり込んで来て艦砲射撃をはじめた。最初はドラム缶を叩く音のようだったが、艦砲だと分かって身震いすることでした。

艦砲射撃で一人が犠牲になった。それからは、空襲だけでなく軍艦が待機している間は日中出歩くことに注意をはらった。

食料確保が昼夜を通しての仕事である。どの家庭も日中は殆ど壕に立てこもり、何もすることなしの生活が続いたが、これではいけないと敵機の襲来を見計らって、昼出来ること夜出来ることを分別して仕事をした。

いも堀は夜の仕事で、明日の食事の準備、炊事一斉は夜にすませておいた。水汲みも壕の側に井戸もなく、五百メートルはなれた井戸から運ぶのも仕事の一つである。

同じ島内でも壕の中に住まいながら、食生活には不自由しない人もいたが、殆ど語り尽くせない実情、特に病人老人をかかえて日々の生活、それは大変だった。医者もおらず、病氣と死は親戚だと昔の人はよくいったもんだ。病氣になれば、ほとんど死を待つばかりでした。

老人も口に合った食事もあげられず、ほんとに氣の毒でした。私の祖母は八十四歳、隣のばあさんも八十を越えて二人とも壕の中でこの世を去った。葬儀もできず、夜家族だけで葬儀をすませ墓まで暗やみの中をやつとのことで葬った。

今思うと、子として孫として十分な看病や食事関係、してあげられなかったこと、只々申し訳なく立派にご昇天なさることを家族中祈るばかりでした。

他には、壕の中でお産する人々も多かった。お産だからといって食事面、栄養になるものを与えられず、息をつないで育てた子供達、今年で五十歳という島の中堅とし

て、産業界、政界等で活躍している。

今思うと、苦しみ、苦勞、難儀を克服して育てられた子供達、耐え忍ぶ根性を身に秘めて育ってきている人間の成長課程に於いて一つの難関にぶち当たることは、その人間を立派に方向づけてくれるものと確信している。

ぜいたくな、何一つ不自由なく育った子供は、世の有難さを知らない、何事も当たり前に考え、自分を抑制する力が欠けているのではないかと思う。

親や祖父祖母の歩んだ道を歩みなさいということではないが、親の歩んだ体験談をよく聞く耳をもつて自分の生き方の糧にしてもらえたらと思う。

学校教育も各学校共昭和二十一年頃には、カヤ葺き校舎が父母の力で建てられ、土壁、すすきとまのほっ立て小屋で子供達の教育はなされた。教科書も紙もノートもな
い子供達、教師は自分達でプリントして教科書代わりにしたり古い本を集めて利用することでした。

食料は、さつまいも、そてつガユが主食で腹がふくれ上がるまで食べないとおちつ

かない状態であった。それだけ子供の伸びる為である。現在、まずしいものを食べ育った親たちの願いは、自分達の苦しい生活を二度と子供達には味あわせたくないという願いと励みとで食生活も安定し、子供達は何一つ不自由なく育っている。今では、構造改善で畑の隅々原野に植えられた蘇鉄の密集地が取り除かれていることは、貴重な財産を失った感じさえある。今、九十歳以上の方々、長命なさっている方々は、おいしいものを食べて生活したのではなく、そてつガユを常食として食べられて健康で長命なさっている。これが何よりの証である。今後昔の食生活、料理方法を伝承し、ヨロン伝統の味を若い奥さん方に経験させたいものです。

五十年の歲月、一口に言えば短いようだが、二十年代、三十年代、四十年代、五十年代、六十年代、平成と、教育面、産業経済面、文化面、大変な活躍ぶりである。

時代の推移にそつておちこぼれのないように、時代の流れ、その時代にそつよう身も心もひきしめて行きたいものと思う。

終戦後、奄美群島は、アメリカの統治下にあり、アメリカからララ物資といって、

衣類では毛布、HBTという服、食品ではアスパラガスの缶詰め、ポークランチョンミート、メリケン粉、各種の缶詰めが支給され、何よりの栄養補給資源であった。三キログラム位かかる缶詰は、猿の缶詰めだとデマが飛び、やがて食べない人もいたが、後は自然になれて食べなかった人も食べるようになった。メリケン粉は各家庭でうどんを作って食べた。特に終戦の翌年は大変でした。早魃で作物が不作、米も十分収穫出来なかった。それでも島民は生きんが為にいろいろと工夫して生活した。学校教育も二十九年九月一日入学式を挙行し学校教育が始動した。校舎はなく、九月十二日仮校舎建築を決定し、立長、池田福統氏、港豊茂氏、数名の厚意で松材の寄贈をいただき校舎建築、作業には高等科の生徒が従事した。仮校舎ながら雨を防ぐことが出来、授業も出来るようになった。

昭和二十年十二月十五日に村教育研究会が再開され、徐々に教育活動も軌道に乗って現在に至っている。

八十歳以上の方々の体験記は語り尽くせないと思う。お年寄りの尊い経験を聞き

今後私達の道しるべにしたいものです。現在のような平和で安心して暮らせることに感謝し人生を全うしたいと願うものです。

座礁LSTと理科教育

光 才 池

終戦三年、歳の瀬もおし迫った十二月二十七日未明、赤崎海岸より沖合約十五〇〇米の堡礁（ピシバナ）に米国所属の約十五〇〇屯級の貨物輸送船（LST）が座礁し、何度か離礁を試みたがかなわず、遂に沖縄の米軍基地へ救援を求め、乗組員は全員無事救助され船は無人のまま放置されるようになった。

当時物資欠乏の島民にとってクリスマス（サンタクロース）の有難い贈物だと言われていた。漁船をもっていた人々の中には、この難破船から残留物品を持ち去り、数月たつて駐在所より例の難破船から物品を持ち出した人々は不法盗品であるので、各

駐在所へ速やかに諸物品を返却するようにとの役場を通じて連絡があり、朝戸駐在所附近には返却された物品が山程積み重ねられていた。その後この難破船には米軍の上陸用舟艇が時々接岸して監視されていたようである。

年明けて昭和二十三年四月、与論村立実業高等学校の英語担当教員として平康邦先生が赴任され生徒の英語指導に卓越した力量を発揮していた。特に英語の通訳にも堪能で来島した米兵の通訳にも努力し、遂に難破船の監視、管理の委任を受けるようになった。

本土より一年遅れて、六、三、三制による新学制改革が施行され、与論中学校が四月より発足し私は実校（二学級）の数学、理科、体育を担当し、中学三年の理科も担当することになっていた。特に理科学習を進める上で実験観察を伴わない理科授業では、生徒に興味関心を持たせ、常に「なぜだろうか」という疑問と「不思議だ」という興味を起させ、この疑問を生徒ひとり一人が自ら解決していこうという意欲を喚起し、自然界の事物事象における原理や法則の理法を理解させることは困難であるとい

う観点を持っていた。

そこで理科実験の用具並びに材料を求めて平康邦先生の案内で同年六月下旬頃始めて難破船に趣き、上甲板には、大型自動車（トラック）が十数台が雨風潮風にさらされたまま放置されているのを見て米国の物量の豊かさに驚嘆しながら船内をくまなく探索した。

その後（夏季休業中）従兄の野口秀吉氏を船頭に新造漁船（約〇・三屯）を借り受け、船内に一泊の予定でアガサの浜から午前九時頃船出し北廻りで帆をかけやつと着いたのが正午前だったと記憶している。船内の設備や備品等は殆んど持ち去られた後で見る影もなかったが、一般に利用出来ない薬品等の保管されている医務室の棚や戸棚の中には、薬品が相当残っていたので劇薬、毒薬、普通薬、試薬等、手当たり次第、メリケン粉袋に固形物と液体とを別々に仕訳して持ち帰った。その主なものを掲げると次のようなものである。

・水酸化ナトリウム

・塩素酸カリウム

・くえん酸ナトリウム

・過マンガン酸カリ

・水酸化カリウム

・重炭酸ナトリウム

・硝酸ナトリウム

・二酸化マンガン

・塩化マグネシウム

・炭酸ナトリウム

・重クロム酸カリウム

・硫黄末

・萆酸

・ヨード（固形）

・硫酸アルミニウム

・塩化ナトリウム

・硫酸マグネシウム

・硫酸

・塩酸

・硝酸

・酢酸

・くえん酸

・エタノール

・無水アルコール

・フェノールフタレイン液

・リトマス紙

・蒸溜水

・メタノール

・エタノール

工業用苛性ソーダ（水酸化ナトリウム）

重炭酸ソーダ（重炭酸ナトリウム）

消石灰（水酸化カルシウム）

硫黄（工業用） 潤滑油（モビール）

希硫酸（バッテリー充電用）

以上化学に利用できる主なものを列記したが外に物理実験に活用される機器並びに部品等については持参した限られた工具で出来るだけ解体持参し、後あとまでこれを活用し簡易実験器具製作に大いに役立てることができた。

それでは物資欠乏の中で理科実験にどのように活用したか、主なものを過去の記憶を辿って記述することにする。

一、苛性ソーダ（水酸化ナトリウム）の利用

1、石けんづくり（シダラ石けん）

ヤブニツケイ（シダラギ）の実を集め果皮を除去し天日にかわかし、これを臼で砕粉したものを鍋で強く炒り、更にこれを木綿ごしに熱い中に絞り出すと液状の油脂がとれる。土れが冷えるとローソクと同様固形化する。これを原料として次の手順で石

けんをつくる。

ホーロー鍋か銅鍋に苛性ソーダの水溶液と水を混ぜて煮沸させながら徐々に例のヤブニツケイの油脂を入れながらよくかくはんすると次第に泡立ちがよくなるので火を弱めつつ適当な時期に油脂の投入を止め、かくはんは続ける。やがて泡立ちがなくなつた頃合いを見て火を止め、少し冷やした後、香料（くえん酸少量）を混入させて型に入れ、冷えると固型の石けんができる。

ラードやバター等でもできるが固形にすることが難しくヤブニツケイ石けんと比較すると泡立ちも劣る。これは脂肪と水酸化ナトリウムが化合して脂肪酸ナトリウム（石けん）とグリセリンが生成するがこのグリセリンが食塩水で除去されなかつたためだろうと思う。

二、硫黄の利用

1、硫黄マツチづくり

厚紙を幅四ミリ長さ六センチ位に切りその先端に加熱して溶かした硫黄をつける。

火種を移す時、炭火に硫黄のついているところをつけて燃焼している間に火を移していく。当時普通のマッチは高価で手に入らなかったので理科実験等で大いに役立つ。唯硫黄が燃焼する時生ずる二酸化硫黄（亜硫酸ガス）の白い煙は有毒であるので吸わないように気をつけること。

2、花火（線香花火）づくり

硫黄末、二酸化マンガン、木炭末、塩素酸カリに水滴少量を加え鶏の翼の羽で軽くよく混ぜ合わせたものを、和紙の上に細長くストローの大きさの量を配り巻きつけ両端を締め糊で固定する。手で握るところには発火薬は省くように工夫して乾燥した後を使用する。

この方法で鉄錆やアルミニウム粉末、銅錆（青銅）等を加えることによつて、発光色が変わるので興味が湧いてくる。

しかしこの実験に際して特に爆発事故等の危険が伴うので、分量を最小限に留めることが大切である。

3、石灰硫黄合剤（六一〇ハップ）殺虫剤

消石灰と粉末にした硫黄を二対一の割合で混ぜ、鍋で炒りながら混ぜ合わせ硫黄が殆ど溶け合わされた頃合いを見て水を徐々に加えよく煮沸させてから冷すと褐色の水溶液ができる。この水溶液は原液であるので使用目的に従って適当な濃度にして使用する。

終戦後、軍の使用した払い下げの毛布等の衣料品には、シラミ類、ノミ類、南京虫、カイセン（ひぜん）、毛ジラミ、田虫等の寄生虫が伝播され、特に入浴等の衛生面に欠けていたので各家庭において非常に困っていた。後にDDTの薬剤が米軍から放出されたがそれ以前、女生徒達の頭のシラミ駆除に特に効果があった。

4、マッチ（燐寸）づくり

軸木の頭薬には塩素酸カリ、二酸化マンガン、硫黄末をうすい澱粉糊でよく混ぜて軸木の頭につける。側薬（あてこすり）として赤燐と硫化アンチモン少量をうすい澱粉糊にまぜて厚紙に平たく塗布してよく乾燥させる。

5、紙雷管（紙玉） 体育用ピストル紙玉

マッチづくりの要領で頭薬と側薬を一緒にして、ぬれた洋紙に適当な間隔で小豆大の窪みをつくり、その中に混合された火薬をつめ、更にうすい糊を塗布した洋紙を重ねて軽く一方から紙と紙の間の空気を、抜き取るように押えて密着させる。そして少し湿り気のあるうちに雷管を切り離し、乾燥させた後数個ずつ別々に保管する。まとめて保管しないこと。

この乾燥された紙雷管は衝撃で一個が爆発するとその箱内の雷管は全部一時に誘爆する危険があるので要注意である。

四、その他の薬品の利用

1、畜牛（雌牛）の膣の消毒剤

過マンガン酸カリウムの溶液の利用で戦後飼養している母牛の不妊症の原因が膣内に寄生するトリコモナスの細菌によるものとわかりその洗浄剤として効果があつた。

2、血書（血液の凝固防止剤）

採血された血液で血書すると血液が途中で凝固する。これを防止するためにはくえん酸ナトリウムの溶液を血液に少量混ぜて書くとよい。(輸血の際使用)

日本復帰運動推進の一環として故山下福裁先生を通じて、血書「悲願祖國復帰」
「信託統治絶対反対、悲願達成祖國復帰」の文字を雅箋紙二枚に揮豪して東京日々新聞に昭和二十四年三月送付して掲載された。

五、むすび

理科学習指導(授業)の基本的な実験等についてはこれを省き、理科クラブ等で日常生活に関係のある主なものを記述した。なお物理関係の指導に当って特に電気関係で船内から持参したエナメル線、バッテリー、雑多な電機部品等は簡易実験器具を考案製作して実験指導上大いに役立つた。

LST座礁と平康邦先生のご尽力は私の戦後の理科教育推進上、大いに貢献したことを記し、深甚なる謝意を表する次第である。

糸満マニユ物語

竹 下 徴

私が小さい頃、親の言い付けを衝かないときには、「糸満に売るぞ」というのがおどし文句であった。いわゆる糸満漁師への年季奉公である。現在の七十歳代以上の方の中には実際経験した方もおられる。十歳以上になると売られる対象になる。いわゆる「おしん」の糸満版である。

糸満では、貝とりや魚とりをさせられたという。泳げない子供は、舟から突き落とされて泳ぐ練習をさせた。おぼれると救いあげ、また突き落とすという苛酷なものだったという。

また、労働も苛酷で、貝や魚の収穫割り当て量があつて、それに満たないと舟にあげてもらえない。舟に上がろうとして舟べりに手をかけると、櫂（かい）でその手が切れんばかりたたかれて、突き落とされる。

極端なことを言えば、売られていったら最後、生殺与奪は親方に振られている。そ

んな話を聞いているから、糸満に売られるのは恐怖そのものであった。子供を泣き止ませるときの切札は、「子供買いが来た」だった。「糸満から子供買いが来た」と言えば瞬時に泣き止んだ。私も弟や妹にこの言葉を言った覚えがある。

次の物語は、実際にあつた明治生まれのマニユ（通称名）の体験記です。

沖縄から与論に泳いで渡つた男の物語

マニユは、家の生活の苦しさを助けるために、十七歳のとき、二か年の契約で、二十円で糸満に身売りをしました。時は大正元年。マニユは、糸満で厳しい魚とりの訓練を受けながら一生懸命に働きました。その厳しさは、口ではとうてい言い表せないということです。

苛酷な労働に耐え、一年半が過ぎた頃、マニユは親方から見込まれ、十八歳の若さで、トムヌイ（舟の舵取り役、リーダー的存在）に指名されました。

面白くないのが、先輩達です。おれ達は五年もなるのに、まだ網打ちがしらにもし

てもらえない。しかも、一昨年来たばかりのあんな若造に、トムヌイをとられてしまった。ついていけるか。先輩達は妬みそねみをつのらせていた。なんとかならないかと相談した結果、「沖にでて、事故に見せ掛けて殺してやろう」ということになり、その段取りを話し合っているところを、その部屋の側を通っていたマニユの友達が聞き、気も動転するほど驚き、用も足さずにとつて返してマニユを起こし、「マニユ、おまえは今すぐここから逃げる、夜が明けると殺される」と、ことの次第を話した。

マニユも意を決し、殺されるより逃げられるだけ逃げようと、寢床をぬけ出した。旧暦の十二月十七日午前二時、沖縄といえども師走の早朝は寒い。でも、マニユは寒いことより、一時も早く逃げなければと、緋の単衣一枚の寝姿で一目散に、沖縄本島の北部に向かって走ったそうです。走ることに人では人に負けない自身があったそうです。走りに走った。後から追っ掛けてくるのではないかという恐怖に襲われながら、なるべく糸満から遠く離れたい一心で走った。

いつしか東の空も白み、自分の吐く息も見えるようになった。それでも走り続けた。

人に見つかりはしないか、人であって呼び止められはしないか、追っ手が来はしないかと時々振り返りながら、いろんな不安にかられつつ、走りに走った。人がこれほど恐いと思ったことはなかった。

とはいえ、いつしか太陽は中天になり、空腹を覚えた。芋畑から芋をむしり取り、それをかじりながら走り続けた。

一昼夜走って奥までたどり着いた。激しい空腹を覚えたが追っ手が来てはいけな
と、十九日の未明、与論島に向かって海に飛び込んだ。紺の単衣を頭にしっかりと結
び、祈りを捧げた。「我が歴代のご先祖様、私はK家の嫡子です。私に生きる望みを
与えお守りください」と、与論に向かってひぎまずき、両手を合わせて祈ってから泳
ぎはじめた。

サメやエイが何度もそばを通り抜けた。フンドシの前だれを外してあとになびかせ
(自分を大きく長く見せるためのサメよけ手段)、必死に泳いだ。神様先祖様と祈りな
がら、泳ぎに泳いだ。

やがて日も西に傾きかける頃、前浜の白い砂浜がかすかに見えはじめた。もう少しだ。懸命に力を振り絞って泳いだ。前浜の砂浜がはつきりと目の中に入ったとき、生きて島に辿り着いたと思った。ほっとしたその瞬間気を失った。

気がついたときは我が家の布団の中だった。たくさんの親戚たちが心配そうに見つめていたそうです。

意識が回復してから聞いた話は、前浜の沖四・五キロの辺で沖縄からマーラン船で商用を済ませて島へ帰るとき、マニユが浮いているのを発見して助けあげたということです。その助けた人が、偶然にも自分の家の前の「幸信」という十五歳年上の兄さんであったので、幸信さんもびっくりして、浜で薪を拾い、火を炊いて暖め、手でこすり、生きがえらせるために懸命の努力をした。そうする間にも人を走らせ、母親や人呼び集めた。浜で三時間、それから戸板に乗せて家に運んで三時間してから、意識が回復したということです。

こうして、マニユは、神様のお陰と自分の力と人の情けによって地獄の淵からはい

上がったわけです。

その後、糸満から連れ戻しにきたそうですが、「働きには出したが、命までやるとは言わなかった」と母親がきっぱりと断ったそうです。

その後、このマニユは、人生の幾山河を越え、九十一歳の天寿を全うして、八年前に他界したそうです。

貧しさのなかにも、雄々しく生きた男の「生き魂」物語である。

平成七年四月記

アギヤー物語

若松北川（明治四十三年生）

沖縄県糸満村（昭和十一年当時）から、大城亀さんが、アギヤーの漁師募集に与論に采た。当時糸満ではアギヤーが盛んになり、鹿児島県の十島村、四国、長崎県の五

島等で操業していた。糸満周辺の漁師だけでは人手不足になり、与論まで募集に来たわけである。

その募集に応じて、兄の若松内渡美と二人で行くことにした。当時沖縄へ渡るのは、天気を見計らってサバニで渡った。今のような定期船は勿論なく。不定期だった。渡し船はあるにはあったが、それも小さな船であてにならなかった。それで何月何日までに来るようにという打ち合せだけだった。

サバニで渡っていった。四国にいくまでは、糸満で網つくるいをしたり、漁具を整えたり準備作業があった。

四国へ行つての配当金は、三百六十円だった。当時の三百円というのは大金だった。今の三百万円には相当しただろう。当時は米も塩も俵で売っていて、米は百斤俵一俵で六円だった。しかしその六円がなくて買えなかった。当時与論でお金持ちといわれたのは、池田行徳さんで千円の現金を持っているといわれていた。

漁期は、旧暦の三月から八月までである。二年間働いた。私は陸でも真面目に働い

たので三百八十円の配当があった。

三年目は、兄の若松内渡美と組んで網と舟を買い求め、他に与論の仲間六名を加えて、大城組傘下の一組として、参加するようにした。網と舟で、一人半前の配当だった。無駄使いもせずに四百円持ち帰った。それを三年間続けた。

大城組は働きがよく、四国で優勝し、優勝旗を糸満へ持ち帰り、高々と掲げ、風になびかせていた。それを見て漁師が大城組に集まってきた。

六年目には、舟と人間をそえて大城組から独立させてもらった。愛媛県から高知県にかけてテングサ取りをした。漁獲については、その地区の漁協と歩合制だった。四分六分（六分がこちら）もあるし、二分八分のところもあった。

テングサ取りの合間をぬって、次の年のアギヤーの操業契約を結んで歩いた。歩合制のところもある。一区画買い上げのところもあった。魚がいるかないかわからない漁場を一千万円もの大金をはたいてめくらめっぽうに買うようにしているが、そうではない。この漁場は何年間休んでいるとか、どこに網を仕掛けたらいいか等詳しい

ことを知っていなければならない。

与論から三十七名のシンカ（臣下・漁師）を連れて、契約をした四国へアギヤーにいった。

アギヤーとは、糸満系の漁法で、「追込み漁」のことである。シルチカといって、網の先に重りをつけ、途中にひらひらする紐をつけ、それを上下させて魚を脅かす道具を持って、一斉に泳ぎ、魚を網へ追い込んでいく。この漁法は、網の目にかかるすべての魚を一網打尽にするので、「禁止漁業」といって、県知事の許可がいる。これに対し、トビウオ漁、一本釣り、延縄などは、「自由漁業」で、許可なしでも誰でもできる。本土でアギヤーをするのは、糸満漁民系の船団だけであった。

私が持っていた母船は、海洋丸といって、七十屯だった。漁船の七十屯といったら、ダンビラ（段平）船なので、相当大的な船であった。七隻のサバニを積んで航行した。網は袋網が高さ四十五メートル、そで網は何百メートルという大きなものであった。ちよつとしたソネ（海中の暗礁）は、一網であげることができた。とった魚は、各地

の魚市場へ掲げたり、仲買人を呼んで買取ってもらったりした。何の魚を何貫目ぐらいと連絡すれば遠くからでも取りにきてくれた。神戸、大阪、大分、北九州等へ、自分たちで直接持っていくたり、船をチャーターして持たせたりした。

漁場は、三月から五月までは、四国周辺だが、六月になるとサバニを積んで、下関海峡を抜けて日本海に移動した。長崎県の五島列島、島根県、隠岐群島、福井県、石川県、新潟県佐渡島までいった。

日本海での漁は旧暦の八月までである。あとは寒くて、魚も凍るが人も凍る。今のように潜水服があるわけではなく、素潜りである。裏日本の海は旧暦の八月にもなると寒くて長くは泳げないので、魚群の近くに網を仕掛け、短時間勝負をした。それでも結構とれた。

漁期が終わると全員島に連れて帰り、棧敷を組み、家族も呼んで漁獲高の総決算を報告し、配当をする。配当は一律ではなく、働いた日数を細かく計算し、配当額を決定した。働きの特別よかった者には十パーセントの華をつけた。その日は福引きもし

てみんな楽しんでんだ。

朝鮮半島と島根の間に、高麗ソネといわれる、昔島だったのが沈み表面が平になった、与論島の十倍ぐらいの大きさの浅瀬がある。そこにはアギヤー船団五・六組が集まって操業していた。とれる魚はイサギが主であった。鯛もとれたが、八割がイサギで二割が他の魚であった。ヒキはとうろと思えば、山のようにとれた。遠くて、朝三時に出発し、帰り着くのは夜の十一時であった。寝る暇もない強行軍だったので組員も嫌がった。

昭和十八・九年には、呉海軍工廠報国隊から徴用を受けて、魚をとって納めた。海軍の食堂係に知人がいたので、その人のついで指定を受けた。納める魚はただではなく、市場の値段で買取ってもらった。私どもの食料一切海軍が支給してくださった。私どもが操業するときには、海軍の兵隊が銃を持って二人乗り込み、旗を掲げて行った。漁船も徴用したければ自由にできた。豊後水道には機雷が設置しており、私どもが航行するときにはちゃんと赤線を引き、安全航行をさせてくださった。

愛媛県の宇和島沖で操業しているときに、機雷が流れていた。すぐに海軍に通報した。海軍は陸から機銃で爆破を試みたが、不発弾だった。その後機雷にもう一度出くわし、肝を冷やした。呉海軍の証明書を持っていたので、徴用もされず、相当優遇された。

昭和十九年には戦乱が激しくなり、組員を簡単には帰島させることができなかった。大分から組員を乗せて帰路に着いたが、昼間は空襲を恐れ、夜間偽装して航行した。昼間は島影の浦浦にひそみ、夜走る。夜でもプロペラが立てる泡が光って見えるので、それを消すために畳やむしろを十枚ほどロープでつないで引きながら航行した。少しでも怪しい物音が聞こえたりするとエンジンを止めて流れた。文字通り、薄氷を踏む思いの航行だった。それでも各列島の港港、浦浦は自分の庭のように知っていたので、避難所には困らなかった。宇検村の焼内湾などは、海が深く、松の木に船をくぐることができた。普通なら二日で来るところを、一週間もかけて無事に島に帰り着かせた。当時は飛行機からの爆撃だけではなく、軍艦や潜水艦からの攻撃もあった。つまり、

制海権も制空権もなく、旅客船は船団を組んで航海していた。私の家内などが乗った鹿児島から大島向けの船団は途中で蹴散されて、命からがら大分、宮崎まで逃げ帰ったものもあつたと聞いた。

私の海洋丸のエンジンの調子が良くなかつたので、那覇の造船所に修理を頼んでいた。二十年の三月にその船を取りにいったが、昨年十月十日の大空襲で、私のものばかりでなく、船という船は全滅していた。

大分県に残してある組員を迎えに向かった。家内も鹿児島に預けてある荷物を取りに行きたいと言つたので、連れてサバニで名瀬に渡つた。名瀬からは船がなかつたので、大熊に沈んでいる船を引き上げて、エンジンを修理して、それで鹿児島に向かうことにした。十二屯ぐらいの漁船であつたが、有村治峯さん、白石本店の社長さん、東本願寺のぼんさん等二十名ほど乗船の希望者があつた。二万円ずつ運賃をもらつて出発した。有村さんは都合悪くなり行かなかつた。その時終戦になつた。敗戦を知らされたときは、まったく驚き信じられなかつた。

戦後も三回、四国へアギヤーにいった。

一網で漁獲の最高量は、八万斤だった。種子島におけるタマンの漁獲だった。タマンという魚は綱や網の上を越えて逃げる魚ではないので、網で追い込みやすかった。段平運搬船の二隻満杯氷つめにして、一隻は鹿児島へ、もう一隻は広島へ持たせた。

一番の苦い思い出は、漁区を侵犯したということ、高知県中村警察署で四日間取り調べを受けた事である。各漁協ごとに沿岸の区域割りがされていて、操業するには各漁協ごとに契約をしなければならぬ。契約をしたところに綱はいれたのだが、組員が泳ぎはじめたのが、他の区域からだったということとがめられた。陸から監視していた。網は没収された。四日間取り調べを受けた後、始末書を書き、三百円の罰金を払い、許してもらった。その間漁は全面休止だったし、経済的・精神的打撃を受けた。

三十七名ないし四十五名の漁師を率いての半年間の操業であつたので、トラブルもあつた。酒を飲んで地元民家に押し入り、無礼になつた者がいて、謝りにいったこと

が何度かあった。

人を束ねる苦労もあった。

二十二歳の若いときの戦前から、戦中・戦後にかけて、日本全国の半分以上を回り、海に潜り、海に生きてきた人生である。私ほど津々浦々の港を知り、海底の様子を知るものもないだろうという自負の念もある。

あつという間だという感じもするが、よくやってきたなという感じもある戦中戦後の思い出である。

平成八年一月記

一瞬の悪夢

池田利徳

昭和二十一年八月三日漁を終え十数人が家路へ急ぐ前浜（与論島）のできごと。

真夏の太陽が西の空に沈みかけた頃、当時四年生だった横山君が地面に何か筒のよ
うなものをつついて耳にあてるしぐさを二〜三回みた。確か二回目か三回目だったと
思う。「ドカーン」という爆発音とともに灰白色の煙がたちのぼる。一個の手榴弾が
爆発したのである。

記憶のないまま時が過ぎる。十数分だろうか、いやそれ以上経っていただろうか。

全身のしびれと周囲からのうめき声で、眠りみたいな状態から目をさます。「あいた、
た、たー」という悲痛な叫び声。「ウーン、ウーン」といううめき声。「痛いようー」

「僕をしなせてくれ」「アチョーイ（父ちゃんよー）ニヤマ、クンヌイ（まだ、来ない
か）、等の声が近くで、またはや離れたところから聞こえて来る。目の前に砂、肩
や右手の感触から砂浜の上に自分の体が横たわっていることにはじめて気づく。まだ、
傷を受けているということを意識していない。起き上がろうとして、頭を三十センチ
位だったろうかもちあげたが、それ以上は無理だった。その瞬間、二メートル位後方
に西田幸利君とあと一人、やや前方に一人、四〜五メートル後方に本畑義助さんとあ

と、一人倒れていた（たぶん山本博一君か沖富雄君）。そして、うめき声と血まみれになっっている友達の姿を知る。まだ自分自身腹部や胸、左もも、左手に重傷を負っているのがわからないまま横になる。周囲からのうめき声、叫び声はひっきりなしに続く。「さようなら」「僕は死ぬよー」という声も聞こえる。たぶん本畑さんの声だったと思う。起き上がれないから目で確かめることができない。そおとと左手で腹部や左ももをさわってみた。指の先が肉の中にくいこむのがわかった。その時、あ、自分もけがをしているんだ、とはじめて知る。

全身がしびれているので痛さは全く感じない。あと一回そおととさわったがこれ以上さわると傷に砂が入って危ないという意識が働き、さわるのをやめた。

数十分位経っていただろうか、もつと早かっただろうか。城の武吉治さんが来られ、「あ、これは大変だ。インドゥー（どれ、）サナギムツチュンチー（ふんどしを持っていくか）」と言われ、私が漁の時使ったふんどしを左手から取り、それを半分にひきさいて、「腕をしばらくしないと出血がひどい。心臓に近いから死んでしまうぞ。」と言い

ながら左腕をしばってくれた。あまりきつすぎたので、「痛いよ」と言ったら、少しゆるめてくれた。

「足などは手のほどこしようなないな、仕方ないな」と言いながら、まわりに倒れている人の手当に行かれた。武さんが応急手当をしてなかったら、今頃別の世界にいたかも知れない。命の恩人である。しばらくして、けがの軽い人達数人が帰る姿を目にした。その後、眠りに似た状態が続いたり、うとうととしていた。あたりは暗くなりかけていた。周囲で物音や人の話し声、叫び声がある。

担架のかわりに雨戸をもって、約二キロの浜に人々が集まってきたのである。でも、私の方は誰も助けにこない。何人か戸板に乗せられ担がれていく。

夕方のもほとんど西へ沈み、しばらく静寂の時が流れ、うめき声も叫び声も聞こえない。私一人夜の浜に横たわっている。家には6歳の弟と祖父母しかいない。そのうち叔父の山岑勝さんが雨戸を持って到着。一人じゃどうしようもない。先程からのどのかわきがひどい。「水が飲みたい」と言ったら、「水を飲むと死んでしまうぞ」と

言われた。再三の願いで、「それでは少しだけ、たくさん飲むと死ぬからね」と近くの流れから手に水をすくって数滴口の中に入れてくれた。

異常に眠けを感じ「眠くなった」と言うと、「眠ると死ぬぞ」と時々私の名前を呼んだり、注意、励ましてくれた。そのうちに朝戸の青年団の川口富当さん、川内陽吉さん等が救出、応援に来てくださった。

雨戸に乗せられ、朝戸の林医院へと向かう。途中、二回程これで死ぬのかなと変な思いが頭をよぎった。

即死1名。軽傷七名位、重傷五名の事故。その関係者や、見物人等で医院前の道路は大混雑、順番は私が最後である。道路上の戸の上に大部待たされた。

私の番になって、看護婦さんが「消毒液が足りない、縫合用の糸が足りない」とか耳にした。終戦直後で、今みたいにいるいろいろな器材、薬品等も揃っていない時代である。林清重医師は軍医あがりである。ランプの明かりを頼りに縫合、手当されたのをうっすらと覚えている。(腹や胸に四カ所、足に一カ所、指一本の傷で、今も体内に破片

があり、飛行機で旅行する時は毎回探知機が鳴るのである。）

二十日位で傷も治り、歩くことができた。その間に同級生の山本博一君、沖富雄君、西田幸利君（当時14歳）、そして本畑義助さん（当時40代後半か）も亡くなられた事を知った。傷の程度からして僕も他界してもおかしくない状態だった。

事故の起こりは八月一日、当時四年生だった横山君が、前浜に流れ着いたアメリカ軍の手榴弾を拾って持っていた。それを山本君が譲り受けたと聞く。

三日の日は作場で牛の餌をやっていたところ、同級生の白尾道広君が「海に魚釣りに行こう」というさそいで、ワタンジの浜に行くことで話がまとまる。

牛の餌を食べさせ、家に帰り漁の準備やテイル（魚等をいれる籠）にさつま芋を入れ、二人して前浜に行く。まだ潮が満潮の状態ともからんで、浜と道路の境目で待つ。そこへ山本君と本畑さんが合流、山本君が昨日横山君からもらった手榴弾をアダンの下から持って来た。

はじめて見る手榴弾にそう恐くはなかった。日本軍のものと形がちがい、羽のよう

なものがついている。投げ方は戦時中、学校で教わっている。誰だったか「爆発させてみようや」ということで、かわるがわる投げてみた。爆発しないのでおかしいということで、本畑さんが安全ピンを抜いた。数回投げたが反応がないので、あきらめて元の場所に山本君が置いて来た。四人は潮もひきつつあったのでワタンジの浜へ行く。友達も増え、七、八名位が同じ所で魚釣りやモリで魚をとる。二、三時間後潮も満ちてきたので皆前浜へと岩づたいに帰る。途中、前浜で麦屋の漁師の人達が大きなサワラの魚を肉と骨を別々にさばいていた。その見物で前浜で漁をした子供たち、ワタンジで漁をした子供たちが二十名近くなった。その一団が前後しながら家路へ帰る途中の出来事である。一団を待ち受けたかのように、みんなにおもちゃみたいに見せたかったかそこは定かでない。まだみんなは歩行中で一人も見物のため彼を取り囲んだ状況ではない。接近しつつあるなかで事故は起きたのである。彼が手榴弾の先を地面にたたき、耳にあてるしぐさを一、二回したのを覚えている。

確か二回目か三回目の時、爆発音と白煙があがったのを覚えている。勿論、横山君

は即死、体の一部も吹っ飛んで数メートル横のソテツの上にひっかかっていたと聞いている。本畑義助さんは私より後の方だったが、二番目に亡くなられたはず。三人の同級生は西田幸利君、山本博一君、沖富雄君の順で数日後他界された。何とも言えない痛ましい事故で、今はその方々のご冥福を祈る気持ちでいっぱいです。

軽傷は大角田治、南広文、川畑政雄、竹安雄君等である。他にもいたと思うが……。無傷等。

教訓として、危険を予知したら近よらない。さわらないということが大事である。文中実名を出しましたが、実話であり、約五十年も経過しているということ、関係者の方々はご了承していただきたい。

この事故で亡くなられた五名の方々、救助の応急手当をしてくださった武義治さん、そして、杯清重医師のご冥福をお祈りしながらこの稿を終えます。

振り向けば未来

竹下 徹（昭和十一年生）

戦後五十年がたった。昭和十九年のことである。私の家から直線距離で三百メートル程離れた池田さんの家が、アメリカ軍の飛行機から空爆を受けて焼けた。黒煙を上げ、パタパタ大きな音をたてて燃えた。大人達は、敵機の来襲を警戒しながら、消火・延焼防止に必死になっていた。当時の屋根は芽ぶきだった。火の粉は天高く上がり、飛び散った。

その火の粉は次の家に落ち燃え上がった。父は次は自分の家かもしれないと警戒した。間もなくして火の粉が私の家の屋根に落ちて燃えだした。ほんのひとつかみ程の大きさでしたので、簡単に消せそうだった。父ははしごを探し回った。見つからないので、隣の木に登ってそこから屋根に飛び移る試みをしたが駄目だった。瞬く間に燃えひろがり、屋根全体が燃え上がった。

父は、家の中から位牌や家財道具を運びだした。

祖母は、天をついて燃えてゆく我が家を見ながら、なすすべもなく、「アーチュム
チヨイ、ワーシンドー、ワーシンドウー（あー、残念だ、私の生涯を捧げて造ったも
の）」こと声を上げて泣き、立ちつくしていた。

父はすべてをあきらめ、着けていた上着を脱ぎ、水にどっぷりとつけ、屋根に向か
って投げ上げ、「さよならどー」と言った。火炎に一矢むくい、我が家への別れであ
る。

間もなくダブルイ（体を大きく震わせる）して、梁が焼け落ちた。家は、梁が焼
け落ちるときは、ダブルイして別れを告げるものだと言われた。

一段と祖母や母の泣き声が大きくなった。私の家から後の田畑さんの家に燃え移り、
更に次の家へ燃え移っていった。あの時はしごがあればと父の悔やみようは痛々しか
った。はしごは隣の人が借りてあったが、皮肉にもその人の家は焼けなかった。父は
死の間際まで、はしごに対し特別な執着心があった。

与論島の周りは敵の軍艦が闊歩していた。昼となく夜となく、艦砲射撃が、「かん

くん、かんくん」と石油缶をたたくような音で何十発も連射された。一度は私どもの頭上を、「どん　ぴゅー　どん」と大きな音とともに二百五十メートル先の田圃に落ちた。

父は、家族が避難できる防空壕を掘った。木がうつそうと茂っている岩場に横穴を掘った。石のみ、つるはし、てがら等で手掘した。私は小学三年生であったが、掘ったのを運び出す加勢をした。クチラ（土混じりのサンゴ石で掘りやすい所）にあたりと作業がはかどり、父は喜んだ。石のみの立ちにくい岩盤にあたりとはかどらず、難儀していた。柔らかいばかりでも爆弾が防げず、防空壕にならない。かといって固いばかりでは掘れない。二、三ヶ所試掘した。ようやく家族が入れるほどの壕ができ、そこに避難した。

昼間出歩くと飛行機に見つかるということで、父母は夜間に行動していた。芋の植え付けも食料調達も全部夜した。

沖縄戦が激しくなり、いよいよ与論に米兵の上陸近しいという情報だった。

村人は、より安全な所に避難した。私の家族は、シルカアブとドーミニアブに別れて避難することになった。村で割り当てがあつたようだった。父母と姉弟四名とはシルカアブに、祖母と私はドーミニアブに行った。祖母は祖母の次女の「トヨ」を頼って行く様という父の指示だった。月の薄明かりのある晩だった。トヨの嫁ぎ先のキーナを回って行くことにした。

避難したら餌がやれないということで、牛や豚の家畜は解き放された。私どもの行く手に大きな牛が、道をふさいで立っていた。祖母は牛を追いやろうとするが、いっこうに動こうとしない。回り道をしようにも遠すぎる。私は怖くて祖母の袖にすがっていた。長い時間が経つたような気がした。ようやく牛が動いた。牛の後を恐る恐る祈るような気持ちでやっと通り抜けた。

ところが、頼みのトヨ叔母は既に出た後だった。私と祖母の二人だけで心細い道をドーミニアブに向かった。待たしても牛が立っていないかと心配しながらだった。ところが又もいた。しかし、今度は子牛だった。「シュッ」と追ったら簡単に去ったの

で助かった。以前にそこは首切らモーミヤの幽霊が出るところだと聞いていたので、その話を思い出して、身の毛が逆立った。

「もう助からないのだからつぶして食べてしまえ」と牛をつぶしたところもあった。父が、大きな赤肉をいただいできて、燻製にして食べさせた。そのおいしかったことは今も忘れられない。

アブの入口は、五〜六メートルの深さの縦穴で、ロープを伝わっておりた。

じめじめしていた。明かりは禁止されていたので、真っ暗だった。簡単なむしろを敷き、横になった。みんな息を潜め、小声で話すようにしていた。

シルカアブに行った母達は、妹が泣き叫び、大変困ったそうである。「ミンチャクシワラビ泣かすな」と周りから叱られ、アブを出てあやそうとすると飛行機が電波探知機で聞いて爆撃するというので、母は自分が泣きたかったとこぼしていた。

シルカアブでは事故が起きた。真夜中だったのにおぼろ月に惑わされて、夜明けと勘違いして避難してきた。アブに降りるときに降り口を間違えて、足を滑らせ落ちて

なくなってしまう。一層暗い空気に包まれた。

日本の特攻隊が、沖縄まで辿り看けずに与論の上空で撃墜されて落ちた。特攻隊員は、洋服や落下傘に火が付き燃えながら、一人は私の家の後方二百メートルの畑に落ちた。色白で、紅顔可憐な美少年だった。遺体は寺崎墓に埋葬された。あと一人は皆田の山田繁雄氏宅近くに落ちたと聞いた。

父は、米兵が上陸してきたら子供たちを殺すために、「猫いらず」を準備していたそうである。ただ、祖母をどう始末するか困惑していたという。自分と一緒に縄で縛り、大きな石をくくりつけて海に飛び込むことを考えていたという。実際に私の親戚で、満州でソ連兵に追われ、子供は川に突き落として殺したが、自分は死にきれずに生きのびた例もある。聞くも無残な事である。

那間小学校の校庭の真ん中に爆弾が落ち、大きな穴が開いていた。校舎も焼けた。私どもは一時、沖正忠さんの屋敷のガジマルの下で授業を受けた。

与論中学校の校舎は、村民が材料を持ち寄り建てたかやぶきの粗末なものだった。

壁はすすきをあんで立てた一メートルほどの高さのもので、下は土間だった。雨が降るときは打ち込んできた。生徒は、めいめいゴザとソーメン箱を持参し、土間に座つて授業を受けた。三年卒業するまで学用品は何一つ満足なものもなかった。

食糧難で、弁当は芋数個とクサビかネバリの干物一・二匹焼いたものを、テル（竹であんだ籠）に入れて持参した。午後は帰るものもいた。

私の父は教員だったが、ほとんど無報酬に近く、食料は自家生産しなければならなかった。兄弟八人で母は、食料確保に難儀していた。夕方は臼にソテツの実を入れ、きねでつき、粉にしてかゆを炊くのである。ソテツの実をつく音が隣近所に聞こえ、それが毎日のようだから、母は「恥ずかしい」と言っていた。そのかゆに、たまにグリンピースなどが入ると最高のご馳走だった。

当時はソテツを畑の境に植えることを奨励していた。実は食料、葉は肥料になる。それに台風にも早魅にも滅法強い。梅雨が明ける頃は、ソテツの雄花を雌花に入れて回った。この人口交配の技術は、私の曾祖父西田德里が沖永良部で習い、与論島に普

及したと聞いている。

芋も十分に成長するまで待ち切らずに、へらで根をあさり大きなものから取って食いつないでいた。

米軍からの配給があった。メリケン粉、缶詰、H B T（洋服）等。メリケン粉で手延べうどんを作ったり、団子にして食べたりした。中には石油臭いものもあったがものともしなかった。

雨が降ったら「農繁休暇」といって学校は休みだった。小・中学生も家庭内労働力の一員だったし、学校の先生方も食料生産をしなければ生きていけなかったからである。生徒同士の芋の生産競争大会もあった。一坪の面積からとれる芋の重さを競うものだった。

どの家庭も牛を一頭以上飼っていて、学校に行く前に草を刈ってきてから行った。帰ってきてからも革刈り、たきぎ拾いが日課だった。薪は、木があまりなく、アダンの葉やソテツの下葉をとってきた。ある日薪をたくさん取ってきたと姉に言ったら、

「手を見せてご覧」といわれた。手に付いている傷の量で取ってきた薪の量がわかるというのである。

海にいつて捕ってくる魚は大切なおかずである。多いときは三枚おろしにして塩をつけ、日乾しをして保存食にした。

中学生になると大人と一緒にアギヤー（追込み漁）にいき、一家の生計を支える者もいた。そんなこんなで中学校を卒業しなかつた者もかなりいる。みんな食うのに必死だった。

沖縄師範学校に在学中で、祖母の甥にあたる徳田久保則が、昭和十九年の休みに帰省していた。

玄関の床下で、夜中物音がするのを祖母が聞き、朝見たら、大きな蛇（アカマタ）が、鶏の巣を抱き、卵を飲み、悠然としてるところだった。大騒動になり、久保則を呼んで退治させることにした。久保則は北沢を連れてかけつけて見事に捕まえてくれた。蛇は門の外の畑に、竹の杭を打ち込み野ざらしにした。道を通る人が見物した。

大人の身長より長かった。

久保則は、その後間もなく学校から「すぐ帰れ」の電報が入り、定期船がないので、サバニを貸し切って沖縄へ渡っていった。止める声もあつたが、本人は責任感が強く、「いや、いかなばならぬ」と言つて旅立つた。今、健児の塔に眠っている。正直、正義感故に若い命を散らした。祖母が時々「行かなくてもよかつたのに」とこぼしていた。健児の塔に詣でた時、徳田久保則の名を何回も指でなぞつた。凜凜しい兄貴だった。

幾百万の人生を狂わし、生命・財産を奪つた戦争。あれから五十年の歳月が流れ、ありとあらゆる事が忘却の彼方へ押しやられようとしている。

忌まわしい戦争体験。忘れたい人、忘れたくない人、忘れてなるまいと思つている人、人それぞれだと思う。いずれであつても、戦争の廃墟の中から立ち上がり今日の繁栄を見た与論。その繁栄と平和の礎に、これらの計り知れない莫大な犠牲があつたことを、日本民族の体験として、後世に継ぎたいものである。

過去を振り返り、立ち止まると未来が見えてくる。

振り返れば未来

平成七年十一月

竹
下
徹